

第V区の概要

第V区は、平成6年度に調査を行った。

V区の北東側には生活道路を隔ててIV区があり、南西側は、VII区につながっていた。

当初は、V区とVII区とを同時に調査する予定であったが、用地の都合でV区を後年度に調査した。

北側に隣接するIV区の全面が³大規模な中世墓域群であり、南側に隣接するVII区では、中世の遺構がほとんど検出できなかったため、調査前からV区の中に中世墓域群の分布の境界があると想定された。

検出できた遺構は、溝5条、土塙23基であった。

検出した遺構と遺物

V区では中世墓域は少なく、近世・近代の溝や土塙、ピットが多少検出できた。

更に、VII区との境界付近で、大きな堀も検出できた。

V区からは、縄文時代の土器・石器、古代から中世にかけての土器・石器が検出されたが、遺物の大半は、帰属する遺構が不明瞭であったので、グリッドで取り上げた。

縄文時代の遺構と遺物

縄文時代と明確に認定できる遺構は、検出できなかった。

遺物については、中世から近世の土塙や溝の覆土、あるいは表土から、若干の土器と石器を検出することができた。

中世から近世・近代の遺構と遺物

溝(第189図)

溝は5条検出したが、覆土や遺物から明確に中世と認定できるものは、SD-3、5だけであり、あとの3条については、中世と認定する事ができなかった。

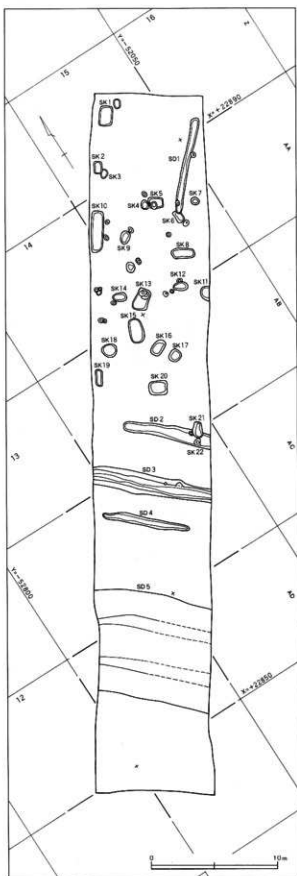
したがって、ここでは、SD-1、2、4については、近世・近代の溝であると考えておきたい。

第1号溝

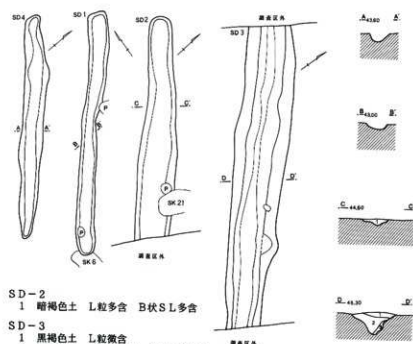
第1号溝は、Z-16グリッドからAB-15グリッドにかけて検出した。AA-16グリッドではピットと、AA-15グリッドでは、SK-6と重複していた。

走向はN-43°Wでやや浅く底が平らな溝であった。

第188図 第V区全図

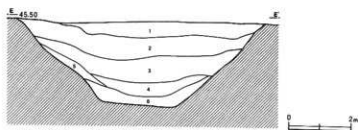
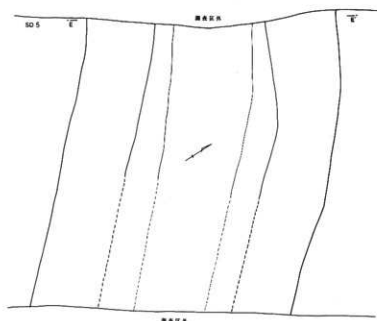


第189図 第1～5号溝



SD-2
1 暗褐色土 L粒多含 B状SL多含

SD-3
1 黒褐色土 L粒微含
2 黒褐色土 L粒少含 |~1cm LB少含
3 茶褐色土 B多含
4 暗褐色土 L粒多含 LB多含



他の溝は北西-南東方向に走行しているが、SD-1のみは北東-南西方向に走行していた。近世の土壌群の中に所在しており、土壌群よりも更に新しいと考えられる。

第2号溝

第2号溝は、AB-14グリッドからAC-14グリッドにかけて検出した。SD-4と並行しており、規模も同程度であることから、同時期のものであると考えられる。AC-14グリッドでは、SK-21、22、ピットと重複していた。

走向はN-48°-Eで、ごく浅く底の形態が不整形な溝であった。

第3号溝

第3号溝は、AB-13グリッドからAC-14グリッドにかけて検出した。走向はN-48°-Eで、断面形態がV字状を呈し、やや深い溝であった。

覆土から中世陶磁器が2点検出できた。

第4号溝

第4号溝は、AC-13グリッドからAC-14グリッドにかけて検出した。走向はN-48°-Eで、断面形態がU字状を呈し、底がやや丸い溝であった。

SD-5
1 明茶褐色土 L主体 年代不明確
耕作に伴う凹地埋め戻土か？
2 茶褐色土 自然堆積土層
L粒・砂粒多含
3 暗茶褐色土 自然堆積土層
上層に比し帯黒 砂粒少含 粘性有
4 黒色土 自然堆積土層
こぶし大の礫多含 強粘性
5 4層に同じ
6 茶色土 自然堆積土層 礫多含
ローム主体

第5号溝

第5号溝は、AC-AD-13グリッドからAD-13-14グリッドにかけて検出した。走向はN-49°-Eで、かなり深い大規模な堀であると考えられる。覆土の状況から、中世の堀であると考えられる。

調査区の横幅の割に溝が深く、検出範囲を完掘することができなかった。

土壌(第190、191図)

土壌は23基検出した。

第1号土壌

第1号土壌は、Z-15グリッドから検出した。主軸方位はN-37°-Wで、形態は長方形であった。

第2号土壌

第2号土壌は、Z-15グリッドから検出した。主軸方位はN-35°-Wで、形態は方形であった。SK-3と重複していた。

第3号土壌

第3号土壌は、Z-15グリッドから検出した。主軸方位はN-40°-Wで、形態は隅丸方形であった。SK-2と重複していた。

第4号土壌

第4号土壌は、AA-15グリッドから検出した。主軸方位はN-43°-Wで、形態は円形であった。

第5号土壌

第5号土壌は、AA-15グリッドから検出した。主軸方位はN-60°-Eで、形態は方形であった。ビットと重複していた。

第6号土壌

第6号土壌は、AA-15グリッドから検出した。主軸方位はNで、形態は隅丸方形であった。SD-1と重複していた。

第7号土壌

第7号土壌は、AA-15グリッドから検出した。主軸方位はN-35°-Eで、形態は円形であった。

第8号土壌

第8号土壌は、AA-15グリッドから検出した。主軸方位はN-62°-Eで、形態は隅丸長方形であった。

第9号土壌

第9号土壌は、AA-15グリッドから検出した。主軸方位はN-55°-Wで、形態は楕円形であった。

第10号土壌

第10号土壌は、AA-15グリッドから検出した。主軸方位はN-35°-Wで、形態は長方形であった。

第11号土壌

第11号土壌は、AB-15グリッドから検出した。主軸方位はN-53°-Eで、形態は隅丸方形であったと考えられる。南西半分は調査区外にかかっていた。

覆土からかわらけが1点出土した。

第12号土壌

第12号土壌は、AB-15グリッドから検出した。主軸方位はN-63°-Eで、形態は楕円形であった。ビット2本と重複していた。

第13号土壌

第13号土壌は、AA-15グリッドから検出した。主軸方位はN-55°-Wで、形態は長方形であった。ビット2本と重複していた。

第14号土壌

第14号土壌は、AA-14グリッドから検出した。主軸方位はN-60°-Eで、形態は隅丸長方形であった。

第15号土壌

第15号土壌は、AB-14グリッドから検出した。主軸方位はN-25°-Wで、形態は隅丸長方形であった。

第16号土壌

第16号土壌は、AB-14グリッドから検出した。主軸方位はN-70°-Wで、形態は長方形であった。

第17号土壌

第17号土壌は、AB-14グリッドから検出した。主軸方位はN-55°-Wで、形態は隅丸方形であった。

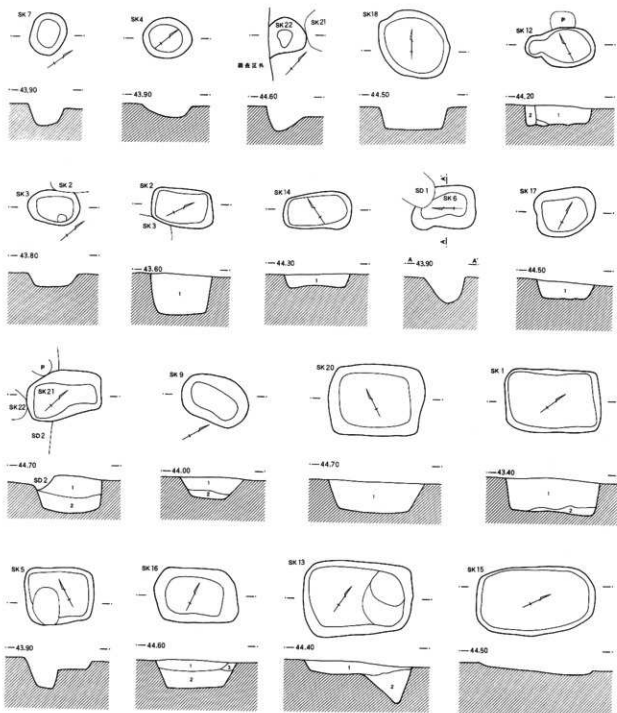
第18号土壌

第18号土壌は、AB-14グリッドから検出した。主軸方位はN-65°-Eで、形態は円形であった。

第19号土壌

第19号土壌は、AB-14グリッドから検出した。主軸方位はN-35°-Wで、形態は長方形であった。

第190図 土壌(1)

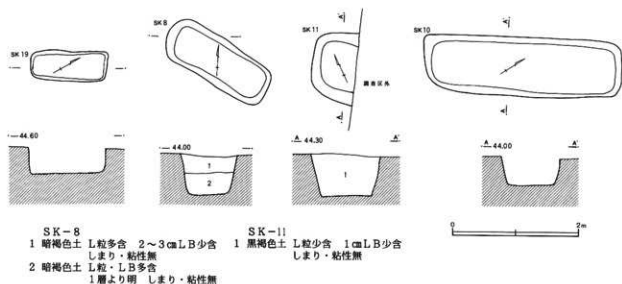


- SK-1
1 暗褐色土 L粒多含 1~2cm LB少含
2 褐色土 L粒・LB多含
- SK-2
1 暗褐色土 L粒多量 1~2cm LB少含
しまり・粘性無 小石少含
- SK-9
1 暗褐色土 2~3cm LB少含量
下部にL粒含
- SK-11
1 暗褐色土 L粒多含 2~3cm LB少量含
黒色土B状含
- 2 暗褐色土 L粒多含

- SK-13
1 茶褐色土 L粒多含 2cm LB含
2 黒色土 2~3cm L粒多含 粘性有
- SK-14
1 暗褐色土 L粒多含 2~3cm LB少含
しまり・粘性無
- SK-18
1 黒褐色土 L粒少量 1cm LB少含
しまり・粘性無
- 2 暗褐色土 L粒多含 1~2cm LB少含
しまり・粘性無
- 3 暗褐色土 L粒・SL多含
しまり・粘性無

- SK-17
1 黒褐色土 L粒子少含 1cm LB少含
しまり・粘性無
- SK-20
1 暗褐色土 L粒多含 SLB状含
- SK-21
1 暗褐色土 L粒多含 2~3cm LB少含
2 褐色土 SL多含 LB多量混入

第191図 土坑(2)



第20号土坑

第20号土坑は、AB-14グリッドから検出した。主軸方位はN-63°-Eで、形態は方形であった。

第21号土坑

第21号土坑は、AC-14グリッドから検出した。主軸方位はN-40°-Wで、形態は長方形であった。SD-2と重複していた。

第22号土坑

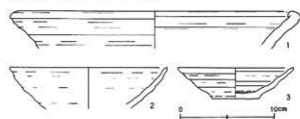
第22号土坑は、AC-14グリッドから検出した。主軸方位はN-47°-Wで、形態は円形であった。SD-2と重複していた。

溝及び土坑出土の中世遺物(第192図)

V区から検出てきた遺物のなかで、遺構に帰属するものは3点であった。

1は、片口の鉢の口縁部破片で、SD-3の覆土から取り上げた。器面はやや良好で、胎土には、1mm以下の長石、石英、角閃石を多少含み、1mm程度の赤色粒子を多少含んでいた。口縁は内側に折り返されていた。

第192図 溝、土坑出土遺物

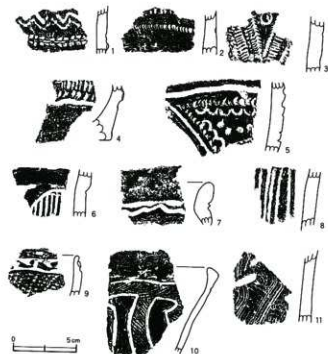


色調は橙褐色であった。

2は、瀬戸美野系の灰釉碗の口縁部破片で、SD-3の覆土から取り上げた。器面は良好で、胎土には、1mm以下の長石粒を少量含んでいた。釉は手付けされ、色調は淡い黄緑色を呈していた。

3は、かわらけの3/4程度の破片で、SK-11の覆土から取り上げた。内外面ともに器面は良好であった。胎土はやや軟質で、1mm以下の長石・石英を多少含み、

第193図 グリッド取り上げ遺物(1)



1mm程度の角閃石を多少含んでいた。色調は器表内外面ともに淡褐色であった。底部は回転糸切り。

グリッド取り上げの遺構と遺物

土壌や溝の覆土中に混入した遺物である。

縄文時代の土器(第193図)

1は押し引きの沈線紋によって文様を施していた。

胎土には雲母を含んでいた。

2～5は爪形文を施していた。3、4は隆帯に沿って、5は沈線に沿って、爪形文を施していた。

6は口辺部の破片であった。楕円形の区画の中に縦位の沈線を施していた。

7は口縁部の破片であった。肥厚する隆帯下に、波状の沈線を施していた。

8は胴部の破片で、縦位の沈線紋を施していた。

9は口縁部の破片で、交互刺突紋を施していた。

10は口縁部破片で、沈線内部に縄文を充填していた。縄文は、LRであった。

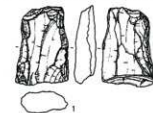
11は櫛歯状工具による模様を、蛇行して垂下させていた。

時期は、1～6は勝坂式、9は加曾利E式、10、11は称名寺、7、8については不明瞭であった。

縄文時代の石器(第194図)

1、2は打製石斧であった。

第194図 グリッド取り上げ遺物(2)



1は撥形であった。刃部を欠損し、基部のみであった。

片側が厚かった。

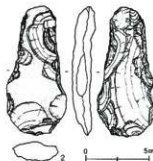
石材は安山岩であった。

2は、撥形であった。表面に自然面を大きく残していた。

円刃であった。

裏面は内割面を大きく残していた。

石材は安山岩であった。

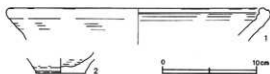


中世の陶磁器(第195図)

1は、片口の鉢の口縁部破片で、表土から取り上げた。内外面ともに器面はやや風化していた。胎土はやや軟質で、1mm以下の長石、石英を微量含み、1～2mmの赤色粒子を多少含んでいた。口縁端部はやや内側に肥厚していた。色調は、淡褐色であった。

2は、かわらけの底部破片で、表土から取り上げた。内外面ともに器面は良好であった。胎土はやや硬質で、1mm以下の長石、石英を微量含んでいた。色調は内面が淡褐色、外面が赤褐色であった。底部は回転糸切り。

第195図 グリッド取り上げ遺物(3)



V区のとまめ

V区の調査は最終年度に行われたため、調査時には既に、北側に隣接するIV区と南側に隣接するVI区の様相が明らかになっていた。これによれば、中世の遺構に関しては、IV区では墓域群が検出され、VI区にはこれが認められなかった。そしてVI区の北端に中世のものと考えられる堀が見つかった。また、近世・近代の遺構に関しては、VII区では土壌や堀が認められていたが、IV区では近世・近代の明確な遺構は認められなかった。

これらのことからV区は、中世墓域群の南端にあたり、なおかつ墓域群の外縁に堀が認められ、近世遺構群の北端にあっていることがあらかじめ予想された。

調査の結果、明確に中世と考えられる墓域は1基検出できたのみであり、更に、墓域群よりも古いと考えられる中世の堀が南側から2本検出された。したがって中世においては、まず12世紀頃に2本の堀が構築され、その後の14～15世紀頃にこの区画の中に、墓域が営まれていたことが明らかとなった。

更に近世の遺構は、この墓域群を避けるようにしてより南側に作られており、近世に至っても、禁忌的な意味合いを持ち続けていたことが理解された。

第Ⅵ区の概要

第Ⅵ区は、平成4年度に調査を行った。

Ⅵ区の北東側はⅤ区につながり、南西側には生活道路を隔ててⅦ区が位置していた。当初は、Ⅴ区とⅦ区とを同時に調査する予定であったが、用地の都合でⅥ区を先行して調査した。

他の調査区同様に、北東向きの緩斜面であったので、調査前には集落の存在を予想したが、発掘の結果、近世・近代の遺構が主体を占めていた。

検出された遺構は、溝4条、土壌5基であった。

第196図 第Ⅵ区全測図



検出した遺構と遺物

Ⅴ区との境界付近で、かなり深いと思われる溝を検出したが、後年のⅤ区の調査時に掘削する事とした。

他の溝や土壌は近世のものであると考えられる。

遺構の覆土からは、遺物は検出できなかった。

近世から近代の遺構と遺物

溝跡(第197図)

溝は、4条検出できた。

第1号溝

第1号溝は、AE-12グリッドから調査区にかかり、AE-13グリッドとAG-11グリッドでそれぞれ直角に曲がり、AG-11グリッド付近に至る位置で検出した。AF-12グリッド付近でSD-3と交差しAG-11グリッド付近でSD-2と重複していた。走向はそれぞれN-59°-W、N-34°-E、N-54°-Wとなっていた。

第2号溝

第2号溝は、AG-11グリッドからAH-11グリッドにかけて検出した。AG-11付近でSD-1と重複していたが、別時期の遺構であると考えられる。走向はN-30°-Eで、細く浅かった。近世の溝であると考えられる。

第3号溝

第3号溝は、AF-11グリッドからAG-12グリッドにかけて検出した。AF-11、12グリッド付近では、SD-4と、AF-12付近では、SD-1と交差していた。走向はN-40°-Wで、やや幅広く明確な底面を持っていた。

第4号溝

第4号溝は、AF-12グリッドからAF-11グリッドにかけて検出した。AF-11グリッド付近では、SD-3と交差していた。走向はN-35°-Eで、ごく浅く痕跡程度の溝であった。覆土からAs-A軽石が検出できたので、近世の溝であると考えられる。

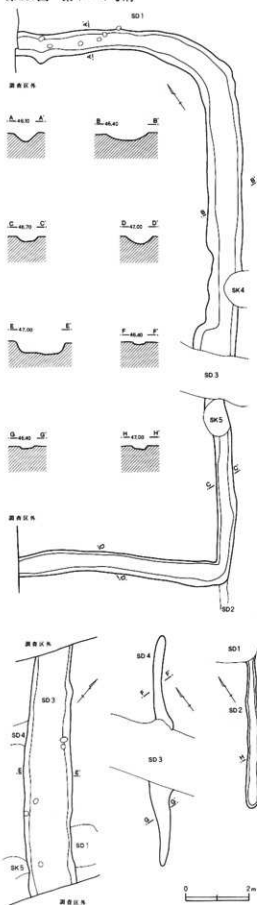
土壌(第198図)

土壌は、5基検出できた。覆土の状況から、いずれも近世の所産であると考えられる。

第1号土壌

第1号土壌は、AD-12グリッドから検出した。主軸方位はN-49°-Wで、形態は隅丸の長方形であった。

第197図 第1～4号溝



第2号土壇

第2号土壇は、AE-12グリッドから検出した。主軸方位はN-57°-Wで、形態は隅丸の長方形であった。

第3号土壇

第3号土壇は、AE-12グリッドから検出した。主軸方位はN-41°-Eで、形態は楕円形であった。

第4号土壇

第4号土壇は、AF-12グリッドから検出した。主軸方位はN-2°-Eで、形態は円形であった。土壇の南東部が調査区外にかかり完掘できなかった。また、北東から南西にかけてSD-1と重複していた。

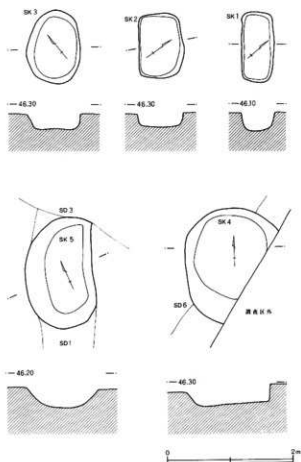
第5号土壇

第5号土壇は、AG-12グリッドから検出した。主軸方位はN-22°-Eで、形態は楕円形であった。土壇は東西方向にかけて、SD-1と重複していた。

遺物

V区からは、遺物は検出できなかった。

第198図 第1～5号土壇



第Ⅶ区の概要

第Ⅶ区は、平成6年度に調査を行った。

Ⅶ区の北東側には、生活道路を隔ててⅥ区が、南西側には国道17号があった。したがって今回の事業地内ではⅦ区が最も南西側に位置し、標高も最も高かった。

調査前には、集落の存在が予想されたが、発掘の結果、近世・近代の遺構が主体を占めていた。

検出した遺構と遺物

検出てきた遺構数は、溝6条、井戸跡1基、土壇13基であった。

遺物は近代のものが大半を占め、ごく少量の縄文土器と中世の砥石を、グリッドで取り上げたのみであった。

近世から近代の遺構と遺物

溝跡(第200図)

溝は、6条検出できた。

第1号溝

第1号溝は、AI-10グリッドからAJ-9グリッドにかけて検出した。SD-2へと連続する可能性があった。AJ-9グリッドでは、SD-4、SD-5と交差していた。走向はN-41°-Eで、ごく浅く底が平らな溝であった。覆土の状況から、近世の境界の溝と考えられる。

第2号溝

第2号溝は、AK-8グリッドからAL-7グリッドにかけて検出した。SD-1へと連続する可能性があった。AK-8グリッドでは、SK-9と重複し、SK-9を切っていた。走向はN-41°-Eで、ごく浅く底が平らな溝であった。覆土の状況から近世の境界の溝と考えられる。

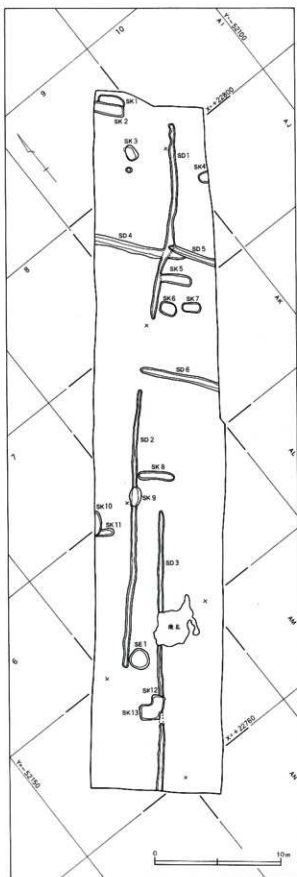
第3号溝

第3号溝は、AL-8グリッドからAM-6グリッドにかけて検出した。AL-7グリッドでは擾乱を受け、AM-7グリッドではSK-12、13と重複していた。走向はN-38°-Eで、ごく浅く底が平らな溝であった。覆土の状況から、近世の境界の溝と考えられる。

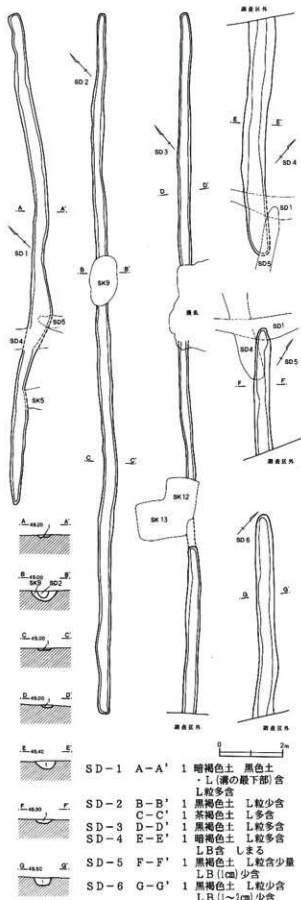
第4号溝

第4号溝は、AJ-9グリッドから検出した。SD-5へと連続する可能性がある。AJ-9グリッドでは、

第199図 第Ⅶ区全測図



第200図 第1～6号溝



SD-1、SD-5と重複していた。走向はN-38°-Wで、断面の形態は弧状を呈し、底部は曲面であった。覆土の状況から、近世の境界の溝と考えられる。

第5号溝

第5号溝は、AJ-9グリッドから検出した。SD-4へと連続する可能性があった。AJ-9グリッドでは、SD-1、SD-4と重複していた。走向はN-34°-Wで、ごく浅く底が平らな溝であった。覆土の状況から、近世の境界の溝と考えられる。

第6号溝

第6号溝は、AK-8グリッドからAK-9グリッドにかけて検出できた。走向はN-41°-Wで、やや深く底は平らな溝であった。覆土の状況から、近世の境界の溝と考えられる。

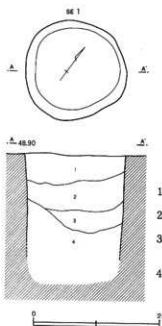
井戸跡(第201図)

井戸跡は、1基検出できた。

第201図 第1号井戸跡

第1号井戸跡

第1号井戸跡は、AM-7グリッドから検出した。底面までの掘削は行わなかった。覆土の状況から、近世の所産であると考えられる。



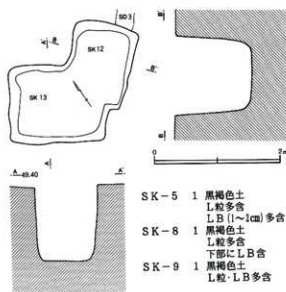
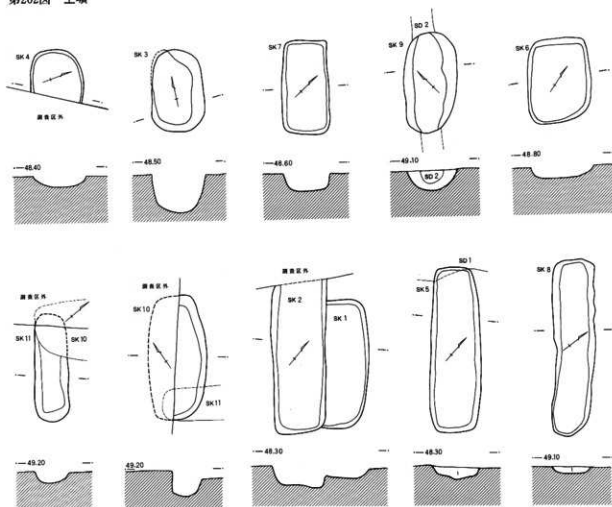
土壌(第202図)

土壌は、13基検出できた。

第1号土壌

第1号土壌は、AI-9グリッドから検出した。主軸方位はN-40°-Wで、形態は隅丸の長方形であった。SK-2と重複していた。覆土の状況から近世の所産で

第202図 土壕



あとと考えられる。

第2号土壕

第2号土壕は、AI-9グリッドから検出した。主軸方位はN-39°-Wで、形態は長方形であった。SK-1と重複していた。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第3号土壕

第3号土壕は、AI-9グリッドから検出した。主軸方位はN-8°-Eで、形態は楕円形であった。覆土の状況から近世の所産と考えられる。

第4号土壕

第4号土壕は、AJ-10グリッドから検出した。主軸方位はN-111°-Wで、形態は隅丸長方形であった。覆土の状況から近世の所産と考えられる。

第5号土壕

第5号土壌は、AJ-9グリッドから検出した。主軸方位はN-45°-Wで、形態は長方形であった。SD-1と重複していた。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第6号土壌

第6号土壌は、AJ-9グリッドから検出した。主軸方位はN-37°-Wで、形態は長方形であった。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第7号土壌

第7号土壌は、AK-9グリッドから検出した。主軸方位はN-50°-Wで、形態は長方形であった。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第8号土壌

第8号土壌は、AK-8グリッドから検出した。主軸方位はN-50°-Wで、形態は長方形であった。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第9号土壌

第9号土壌は、AK-8グリッドから検出した。主軸方位はN-44°-Eで、形態は楕円形であった。SD-2と重複していた。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第10号土壌

第10号土壌は、AK-7グリッドから検出した。主軸方位はN-32°-Eで、形態は楕円形であった。SK-11と重複していた。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第11号土壌

第11号土壌は、AL-7グリッドから検出した。主軸方位はN-54°-Wで、形態は長方形であった。SK-10と重複していた。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第12号土壌

第12号土壌は、AM-7グリッドから検出した。主軸方位はN-47°-Eで、形態は長方形であった。SK-13と重複していた。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

第13号土壌

第13号土壌は、AM-7グリッドから検出した。主軸方位はN-57°-Wで、形態は長方形であった。SK-12と重複していた。覆土の状況から近世の所産であると考えられる。

グリッド取り上げの遺物

帰属する遺構が不明瞭な縄文時代の土器、中世の砥石をグリッドで取り上げた。

縄文時代の土器(第203図)

第203図1、2は縄文時代中期後葉の加曾利E式土器であった。

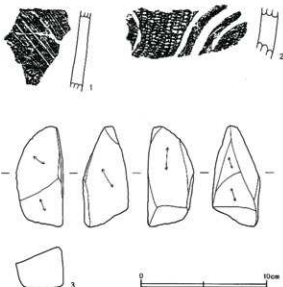
1は、斜めに条線が施されていた。

2は、曲線的な隆帯と沈線が施されていた。地文にRLの縄文が施されていた。

中世の砥石(第203図)

3は、中世の砥石であった。石質は凝灰岩系で、四側面全てが使用されていた。上端は側面からの斜めの研磨で落とされ、下端は欠落あるいは、粗調整のままであった。

第203図 グリッド取り上げ遺物



VII区のとまめ

VII区からは、縄文時代の遺構は検出されず、中世の遺構の主体的な分布範囲もII区からIV区まであり、近世・近代の遺構が主体を占めていた。

近世・近代においては、街道に沿った地割りがなされていたと考えられる。

(1) その他の縄文土器

縄文土器は住居跡が構築された中期のものが大部分であった。中期以外の土器については、前期、後・晩期の土器が出土したが、各区から散見的に出土するといった状況だった。そこでこれらの土器については各区の記述から分離し、本項でまとめて行うこととした。

前期の土器(第204～206図)

いずれも前期後葉の所産である。諸磯a式(第204図1)、諸磯b式(第204図2～45、第205図1～15)、諸磯c式(第205図16～47、第206図1～42)、浮島式(第206図43)、興津式(第206図44、45)が出土している。

第204図1は竹管文を施す。縄文はRである。

第204図2～29は浮線文系土器である。

2～4は口縁部の破片である。口縁部が内湾するキャリパー形の形態である。口縁部に横位に浮線文を巡らせる。浮線文上には斜位の刻みを施す。2、3は地文にRLの縄文を施す。

5～19は胴部の破片である。いずれも浮線文上には斜位の刻みを施す。5～8は渦巻状の浮線文、9～19は横走する浮線文が見られる。6、9～16は地文にRLの縄文が認められる。

20は口縁部が「く」の字状に内折する形態の深鉢形土器である。刻みを施した浮線文を多数並行して施す。浮線文の幅は2～19に比べて細く、薄い。21、22も同種の浮線文を施す。21は口縁部近くの破片で強く内傾している。浮線文と器壁の胎土をかえて色調に変化を出している。浮線文は黄褐色、器壁は淡い褐色である。22は胴部の破片で、並行する浮線文が見られる。

24、25は浮線文上に竹管状の刻みを施す。25は地文にRLの縄文が見られる。

23、26～29は浮線文を沈線や刻みのみの施文におきかえたものである。23は胴部の破片で竹管文と刻みによって施文する。28は竹管文による刻みのみを横位に施す。小突起を施す。26は胴部の破片で刺突と刻みを施す。27、29は小刺突を連続的に施す。27は口縁部が「く」の字状に内折する形態の土器である。29は口縁部近くで張り出し、内傾気味に立ち上がる形態の土器

である。

第204図30は波状部の破片で竹管文により文様を施す。波頂部下に凹形の貼付文を施す。第204図31、32、35は結節沈線が竹管文によって施される土器である。31は靴先状に屈曲して強く内傾する口縁部の破片である。32も口縁部の破片である。35は波状部の破片である。波長部直下には縦位に稜線が見られる。33、34は竹管文と刻みがやや疎らに施される。

第204図36～42は器形が口縁部近くで靴先状に張り出す形態の土器で、集合平行沈線が口縁部近くに施される。36、37は口縁部が直立気味に立ち上がる形態である。口縁部に沿って凹凸文を施す。38～42はいずれも口縁部近くの破片である。

第204図43～45は口縁部が内湾して立ち上がる形態の土器である。口縁部に凹凸文、集合平行沈線を施す。

第205図1は「く」の字状に口縁部が内折する形態である。平行沈線を間隔をおいて帯状に施文する。

第205図2、3は口縁部が内湾する形態の土器で、竹管文による集合沈線を縦位に施文する。やや粗雑な竹管文である。4も同種の集合沈線を施す土器で胴部の破片である。

第205図5は板状の把手である。沈線文を斜位に施す。側面には矢羽根状に施す。

第205図6～13は集合沈線が施される胴部の破片である。6～8、10、11は平行沈線を帯状に施し、その間に斜方向の沈線を施す。10は地文にRLの縄文を施文する。9は帯状の平行沈線間に縄文が施される。縄文はRLである。12は帯状の平行沈線間に矢羽根状に沈線を施す。13は曲線的に集合沈線が施される。

第205図14、15は疎らに竹管文が施された胴部の破片である。

第205図16～42は集合沈線が施される土器のうち、各種の貼付文が見られる土器である。

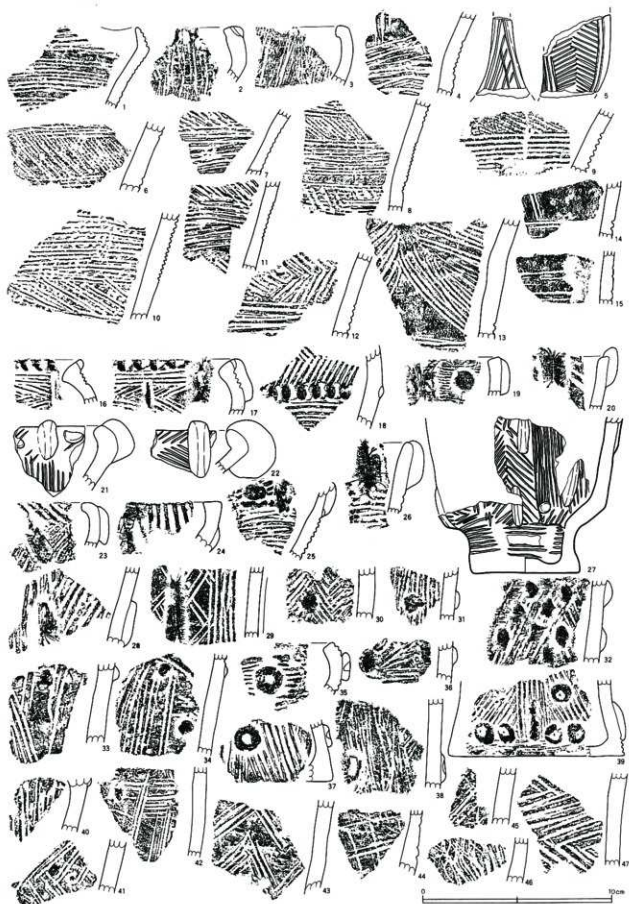
16～18は口唇部や口縁部近くの屈曲に凹凸文が施される。口縁部は横位、矢羽根状に沈線が施される。17は縦長の貼付文を施す。

19～26は縦長の貼付文を施す。19、21、25にはボタ

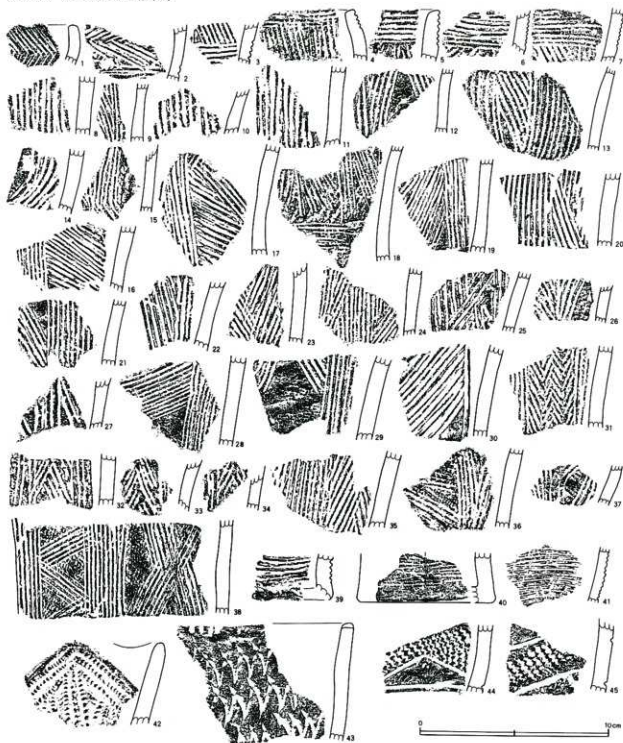
第204図 縄文前期の土器(1)



第205図 縄文前期の土器(2)



第206図 縄文前期の土器(3)



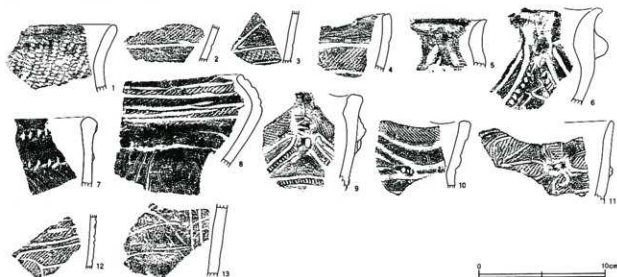
ン状の貼付が見られる。口縁部は直立気味に立ち上がる形態、外傾する形態、内湾する形態などがある。

27～42は底部、胴部の破片である。27は底部である。底部近くは横位に、胴部は縦位、矢羽根状に集合沈線を施す。縦長、ボタン状の貼付文を施す。底部近くで屈曲する形態である。

28、29は縦長の貼付文、30、31はボタン状の貼付文、32、33、36は不整な楕円形の貼付文、35、37～39は刺突のあるボタン状貼付文、40～42は小さく不整な貼付文を施す。41は貼付文上に刺突を施す。

28、29は縦位、斜位の沈線を施す。30は板状の把手部分である。鋸歯状に沈線を施す。31は縦位の沈線を

第207図 縄文後晩期の土器



施す。32は格子状に沈線を施す。33、34は斜位に沈線を施す。やや疎らな集合沈線である。35は口縁部である。横位に沈線を施す。36は横位、斜位に沈線を施す。37～39は縦位、斜位に沈線を施す。40～42は斜位に沈線が施される。やや疎らな施文である。40～42の集合沈線と同種のものとして43～47がある。

第206図1～41も集合沈線が施される土器である。1～7は口縁部、もしくは口縁部近くの破片である。横位や矢羽根状に集合沈線を施す。8～39は胴部の破片である。縦位の集合沈線間に斜位もしくは弧状、格子状に集合沈線を施す。18は不明瞭ながらも地文縄文が見られる。36～38はR Lの縄文により地文を施す。39、40は底部の破片で横位の集合沈線を施す。41にも横位の集合沈線が見られる。

第206図42は結節浮線文を施す。波状部の破片である。口縁に沿って、また波頂部から縦位に結節浮線を施している。竹管文による集合沈線を地文とする。

第206図43は貝殻腹縁による圧痕を器面に施す。口唇部の一部に刻みを施す。第206図44、45は胴部の破片で、鋸歯状の区画内に貝殻腹縁による圧痕を施す。

後・晩期の土器(第207図)

第207図1は後期前葉の粗製土器である。縄文はL R。2、3は堀之内2式の朝顔形の深鉢形土器である。沈線区画内にL Rの縄文を施す。3は三角形の区画文

が見られる。4は加曾利B式と思われる。縄文はL R。第207図5～11は後期後葉の土器である。

5、6は4単位の波状縁を呈する深鉢形土器である。5は波頂部の破片である。6は波頂部下に縦長の貼付文を施し、口縁部に沿って沈線文、刺突文を施す。体部には蛇行沈線が垂下する。7は口縁部が直立気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。口縁部に刻みを2段に施す。体部には斜条線を施す。8は口縁部が内傾する形態の浅鉢形土器である。口縁部に4条沈線を巡らせ、磨消縄文にしている。縄文はL Rである。8は曾谷式、5～7は安行1式段階であろう。

9、10は安行系の波状口縁土器である。

9は波状部の破片で、縦長の貼付文、豚鼻状貼付文を施す。三角形区画文は刻みを施す。縄文はR Lである。10は波底部の破片で、豚鼻状貼付を施す。区画文の隆帯にも縄文を施す。縄文はR L。9、10は安行2式であろう。

第207図11～13は晩期安行式土器である。

11は平口縁の鉢形土器である。曲線的モチーフにより磨消縄文を施す。縄文はL R。安行3 a式であろう。12は沈線間に縄文と点列を施す。三叉文による入組文を体部に配し、磨消縄文とする。縄文はL R。安行3 b式である。13は横位、縦位、弧状の沈線を施す。安行3 c式である。

(2) 土偶(第208図)

土偶は2個体が出土している。いずれも遺構外からの出土で、特殊な出土状況は示しておらず偶然見つかったものである。他に土偶の破片は見られず、接合例はない。

以下に個々の説明を加えていきたい。

第208図-1は、上半身を欠損した土偶で、残っている下半身からも腹部が剥落しており、左脚の先端も欠けている。破損面はいずれも摩耗しており、土偶の廃棄時の欠損であるか否かは断定できない。

造りはさほど丁寧ではなく、正面に施された円形刺突もやや乱れている。胎土に含まれる砂粒は少なく、粒子は密である。焼成もしっかりしている。現存高は約6.8cmで、完全ならば20cm弱はあったと思われる。なお、破損面からは、製作技法は観察できなかった。

土偶の形態は扁平で、背面がわずかに凹んでいる。両脚は、ほぼ水平に横に張りだしており、円みを帯びた先端部には、浅い刻みが付けられている。

文様は、正面に円形の刺突列が施されているが、個々の刺突の大きさは一定せず、刺突列もやや乱れている。

正面の横走る刺突列の下部にもわずかな凹みが見られる。背面は無文である。

色調は、橙色に近い褐色で、赤彩の痕跡は、見られない。

時期は、形態的な特長から、中期末～後期前葉のものと思われるが、同時期の土器は出土していない。

第208図-2は、土偶の左脚である。破損面の摩耗はさほどではないが、土偶の廃棄時の破損であるか否かは断定できない。

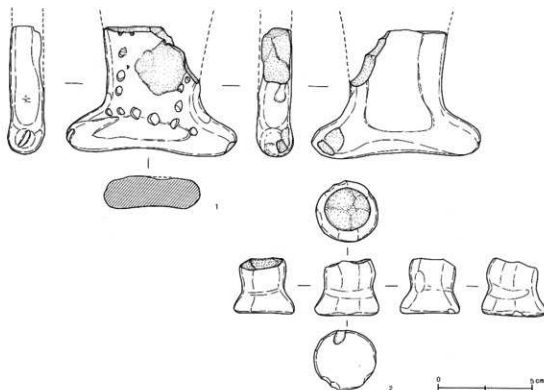
造りは比較的丁寧である。胎土に含まれる砂粒は少なく、粒子は密である。焼成もしっかりしている。現存高は約3cmである。1の土偶同様、破損面から製作技法の観察はできなかった。

土偶の脚底は円形で、脚部もほぼ円柱状であるが、膝の部分はやや脹らみを持つ。脚頸はくびれている。

文様は無い。内側の色調は、橙色に近い褐色であるが、外側は黒色に近い。脚先と脚底に赤彩の痕跡が見られる。

時期は、形態的な特長から後期後半のものと思われる。

第208図 土偶



(3) 埴輪(第209図)

井戸・土城等の覆土中に流れ込んだ状態で埴輪片が少量検出された。調査区周辺には菅原稲荷塚古墳をはじめとする普濟寺古墳群が存在していることから、後世の開発等によって既に消滅してしまった古墳が周囲に所在していたものと想定される。

実測図示できた資料は合計17点を数える。1のみが形象埴輪の破片で、他は普通円筒埴輪の破片である。小片が多く全体の形がわかるものがないため口縁部、胴部、底部、透孔、突帯などの器形の各部位を中心にその特徴を説明したい。

1は人物埴輪の右耳周辺の破片と思われる。直径約1.5cmの円孔を開けて耳部を表現したもので、その上端に棒状工具による刺突痕がある。顔は粘土帯を薄く貼りつけて輪郭を表現し、表面に指ナデを施す。粘土紐の巻き上げ成形で、外面は縦ハケ、内面は指ナデを施す。胎土は角閃石粒子、白色粒子の混入が目立つ。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。

2～5は突帯部分の破片を一括した。2は透孔下端から突帯にかけての破片である。突帯は上辺の突出した低台形を呈し、ヨコナデを幅広く施す。透孔は残存部の形態からすれば円形と考えられる。外面調整は縦ハケ、内面調整は斜めハケの後、ナデを施す。3は突帯部分の破片である。突帯の形状は2に近く、内外面調整はほぼ同じである。2・3は胎土に多量の角閃石粒子を含むのが特徴で、焼成良好、色調は淡褐色を呈する。4は突帯が断面低台形を呈し、ヨコナデの幅が狭く、下端のナデつけはやや雑である。外面調整は縦ハケ、内面調整は斜めハケを施す。胎土は角閃石粒子を含まず、砂粒の混入が顕著である。焼成は普通で、橙褐色を呈する。5は突帯の剥離した破片で、器肉が全体に薄い。外面調整は縦ハケ、内面調整はナデを施す。胎土は赤色粒子、角閃石粒子の混入が多い。焼成は普通で、色調は橙褐色である。

6～14は胴部の破片を一括した。胎土・焼成・色調等の特徴から3つのグループに分けられる。

6・8・13は胎土に片岩粒子、赤色粒子の混入が顕

著で、柔らかい焼き上がりのものである。このうち8には白色針状物質が少量含まれており注目される。外面調整は縦ハケで、6は2cmあたり13本とハケメが細かいのに対して、8は9本と粗い。内面調整は縦方向のナデを施す。13には突帯のヨコナデが見られる。

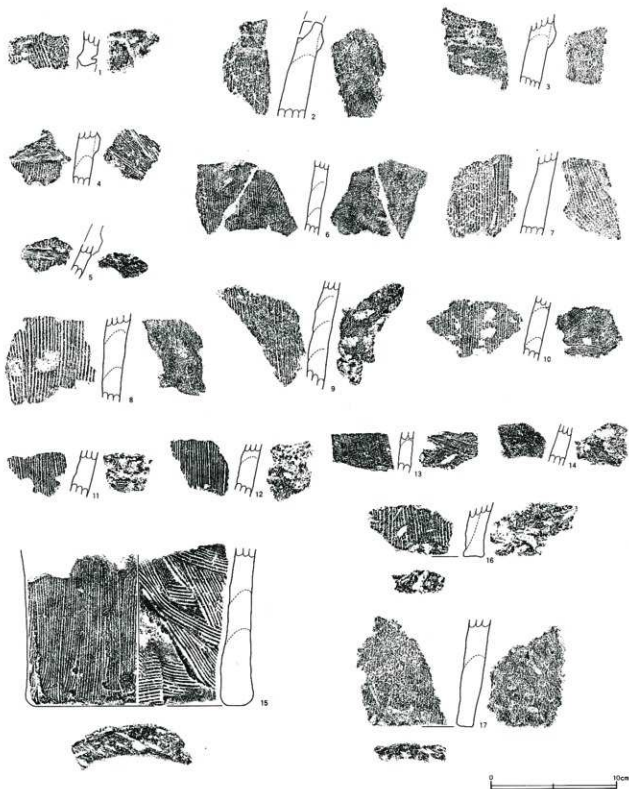
7・9・14は胎土に多量の角閃石粒子及び砂粒を含むものである。このうち9は赤色粒子の混入が目立ち、内面に粘土紐の巻き上げ痕が良く残る。外面調整は縦ハケで、内面調整はナデ及び斜めハケを施す。焼成は普通で、色調は橙褐色を基調とする。

10～12は胎土に砂粒の混入が少量のもので、角閃石粒子、赤色粒子を少量含む。外面調整は縦ハケで、ハケメは2cmあたり11～12本と細かい。内面調整は斜めハケをナデ消す。硬質に焼き上がり、色調は淡褐色を基調とする。

15～17は底部の破片を一括した。いずれも底部調整は施されていない。15は底径約18cm、最下段高12.3cm以上を測る中型の円筒埴輪と推定される。幅6cm程の粘土帯で基底部を形作り、その上に幅3cm前後の粘土紐を巻き上げている。外面調整は縦ハケを施す。ハケメは2cmあたり12本である。内面調整はナデを施した後、横ないし斜め方向のハケメをやや粗雑に施している。工具幅は約3.8cmを測り、ハケメの数は約15本を数える。胎土は角閃石粒子の混入が目立ち、赤色粒子を少量含む。焼成は良好で、色調は赤褐色。

16は底面に植物繊維の圧痕が見られる。外面調整は縦ハケ、内面調整はナデを施す。胎土は角閃石粒子の混入が多く、他に赤色粒子、白色粒子を含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。17は幅約5.6cmの基底部を形作り、底面に合せ目が観察される。器表面は風化が著しい。外面調整は縦ハケ、内面調整は斜めハケ後、ナデ調整を加える。胎土は角閃石粒子、砂粒の混入が目立つ。焼成は普通で、色調は橙褐色を呈する。

出土した埴輪は小片が多く、時代的な特徴の判明するものは少ないが、形態化した突帯や胎土、焼成、色調等の特徴から概ね6世紀後半代を中心とする時期に位置づけておきたい。



(4) 古銭(第210~214図)

菅原遺跡出土の古銭について、表と拓影を一括掲載した。

表の掲載項目の中で、番号は任意につけた通し番号で、銭種は判読可能なもののみ記載した。また鑄着番号は、錆によって複数の古銭が付着していた資料について、同一の塊に対して、同一の記号を付した。国名は鑄造した国名で、初鑄年は遺構の年代の目安として

番号	遺構	区	銭種	鑄着	国	初鑄年
1	SJ-12	2				
2	SJ-12	2	元祐通寶		北宋	1086
3	SK-23	2	永樂通寶	a	明	1408
4	SK-23	2	開元通寶	a	唐	621
5	SK-23	2	開元通寶	b	唐	621
6	SK-23	2	開元通寶	b	唐	621
7	SK-23	2	嘉祐通寶	c	北宋	1056
8	SK-23	2	嘉祐通寶	c	北宋	1056
9	SK-41	2	永樂通寶		明	1408
10	SK-41	2	永樂通寶		明	1408
11	SK-42	2	政和通寶		北宋	1111
12	SK-42	2	永樂通寶		明	1408
13	SK-42	2	洪武通寶		明	1368
14	SK-42	2	永樂通寶		明	1408
15	SK-42	2	洪武通寶		明	1368
16	SK-42	2	政和通寶		北宋	1111
17	SK-42	2	紹聖元寶		北宋	1094
18	SK-49	2	皇宋通寶		北宋	1038
19	SK-70	2	天禧通寶		北宋	1017
20	SK-70	2	嘉祐通寶		北宋	1056
21	SK-70	2	熙寧元寶		北宋	1068
22	SK-70	2	景德元寶		北宋	1004
23	SK-70	2	聖宋元寶		北宋	1101
24	SK-70	2	開元通寶		唐	621
25	SK-70	2	祥符元寶		北宋	1009
26	SK-74	2	熙寧元寶			
27	SK-74	2	祥符通寶		北宋	1009
28	SK-74	2	咸平元寶		北宋	998
29	SK-74	2	不明			
30	SK-74	2	不明			

掲載した。

土城出土の銭については、初鑄年が621年~1408とになっているが、この中で、621年とした開元通寶は長期間鑄造されており、年代の上限の目安とはならない。

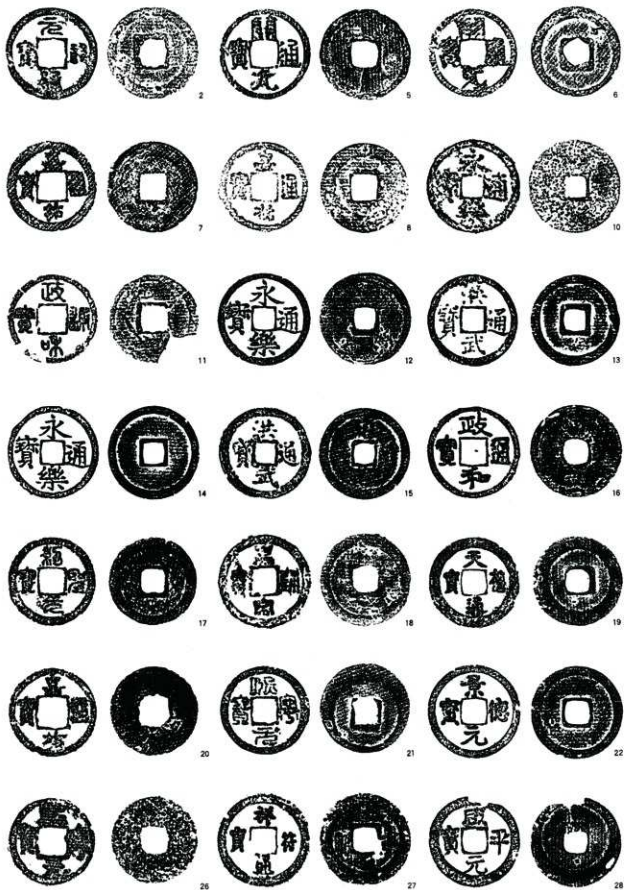
土城出土の銭には永樂通寶が含まれてはいるものの出土率が低く、寛永通寶が含まれていないことから、土城の年代を15~17世紀の間でも、特に15世紀前後とする事ができよう。

番号	遺構	区	銭種	鑄着	国	初鑄年
31	SK-79	2	不明			
32	SK-95	2	元豐通寶		北宋	1078
33	SK-95	2	慶元通寶		南宋	1195
34	SK-95	2	正隆元寶		金	1157
35	SK-95	2	正隆元寶		金	1157
36	SK-95	2	正隆元寶		金	1157
37	SK-95	2	正隆元寶		金	1157
38	SK-104	2	不明			
39	SK-104	2	聖宋元寶		北宋	1101
40	SK-104	2	元豐通寶		北宋	1078
41	SK-104	2	洪武通寶		明	1368
42	SK-104	2	元豐通寶		北宋	1078
43	SK-104	2	天聖元寶		北宋	1023
44	SK-105	2	紹聖元寶		北宋	1094
45	SK-105	2	元豐通寶		北宋	1078
46	SK-105	2	天聖元寶		北宋	1023
47	SK-105	2	洪武通寶		明	1368
48	SK-105	2	天禧通寶		北宋	1017
49	SK-105	2	洪武通寶		明	1368
50	SK-105	2	至道元寶		北宋	995
51	SK-105	2	永樂通寶		明	1408
52	SK-105	2	元祐通寶		北宋	1086
53	SK-105	2	至元通寶		元	1285
54	SK-105	2	景德元寶		北宋	1004
55	SK-105	2	永樂通寶		明	1408
56	SK-108	2	治平元寶		北宋	1064
57	SK-108	2	元豐通寶		北宋	1078
58	SK-108	2	祥符元寶		北宋	1009
59	SK-108	2	開元通寶		唐	621
60	SK-108	2	元豐通寶			

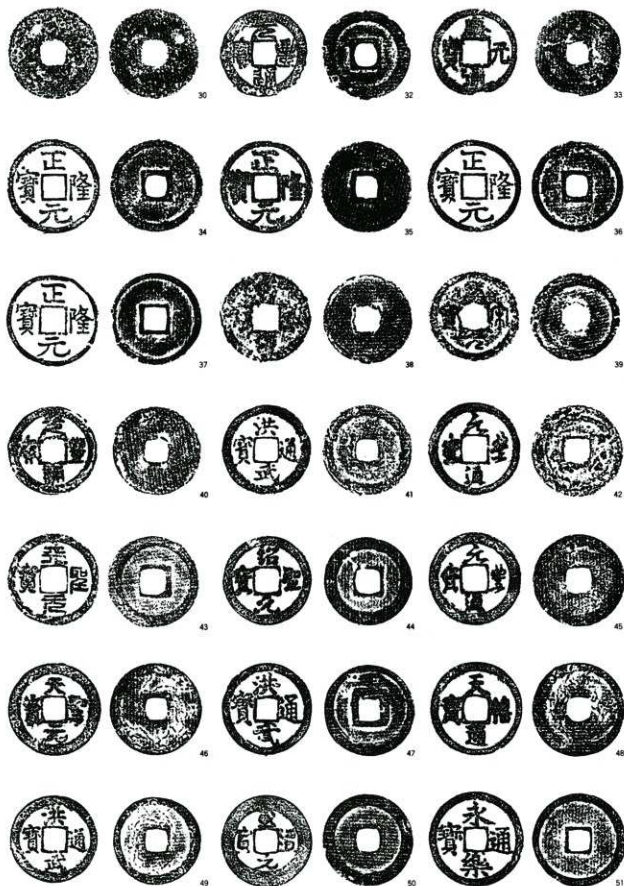
番号	造 構	区	銭 種	銘着	国	初鑄年
61	SK-108	2	元豐通寶		北宋	1078
62	SK-114	2	熙寧元寶		北宋	1068
63	第1号 道路状遺構	2	不明			
64	N-22-3	2	元祐通寶		北宋	1086
65	N-22-3	2	祥符元寶		北宋	1009
66	表土	2	聖宋元寶		北宋	1101
67	表土	2	元祐通寶		北宋	1086
68	表土	2	不明			
69	表土	2	不明	d		
70	表土	2	不明	d		
71	表土	2	元豐通寶	e	北宋	1078
72	表土	2	紹聖元寶	e	北宋	1094
73	表土	2	不明			
74	表土	2	開元通寶		唐	621
75	表土	2	嘉祐通寶	f	北宋	1056
76	表土	2	永樂通寶	f	明	1408
77	表土	2	寛永通寶		日本	1636
78	表土	2	皇宋通寶?	g	北宋	1038
79	表土	2	元豐通寶	g	北宋	1078
80	表土	2	不明	g		
81	表土	2	祥符元寶	g	北宋	1009
82	表土	2	嘉祐通寶	h	北宋	1056
83	表土	2	皇宋通寶	h	北宋	1038
84	表土	2	不明			
85	表土	2	不明	i		
86	表土	2	皇宋通寶	i	北宋	1038
87	表土	2	永樂通寶	i	明	1408
88	表土	2	皇宋通寶	i	北宋	1038
89	表土	2	大觀通寶	i	北宋	1107
90	表土	2	不明	i		
91	表土	2	祥符通寶	i	北宋	1009
92	表土	2	政和通寶	i	北宋	1111
93	表土	2	大觀通寶	i	北宋	1107
94	表土	2	元□通寶	i		
95	表土	2	元祐通寶	i	北宋	1086
96	表土	2	永樂通寶	i	明	1408
97	表土	2	天禧通寶	i	北宋	1017
98	表土	2	聖宋元寶	i	北宋	1101

番号	遺構	区	銭種	銘着	国	初鑄年
99	SK-1	3	開元通寶		唐	621
100	SK-7	3	嘉祐元寶		北宋	1056
101	SK-11	3	洪武通寶		明	1368
102	SK-109	3	不明			
103	SK-109	3	至和元寶	j	北宋	1054
104	SK-109	3	宋通元寶	j	北宋	960
105	表土	3	不明	k		
106	表土	3	不明	k		
107	表土	3	不明	k		
108	表土	3	不明	k		
109	表土	3	不明	l		
110	表土	3	不明	l		
111	表土	3	不明	l		
112	表土	3	不明	m		
113	表土	3	不明	m		
114	表土	3	不明	m		
115	表土	3	不明	m		
116	SK-1	4	不明			
117	SK-1	4	紹聖元寶	n	北宋	1094
118	SK-1	4	元豐通寶	n	北宋	1078
119	SK-99	4	不明			
120	SK-99	4	不明			
121	SK-99	4	不明			
122	SK-99	4	皇宋通寶		北宋	1038
123	SK-99	4	不明			
124	SK-511	4	不明			
125	SK-511	4	開元通寶		唐	621
126	SK-514	4	不明			
127	SK-527	4	洪武通寶		明	1368
128	表土	4	熙寧元寶		北宋	1068
129	表土	4	天禧通寶		北宋	1017
130	表土	4	不明			
131	表土	4	不明			
132	表土	4	咸平元寶	o	北宋	998
133	表土	4	皇宋通寶	o	北宋	1038
134	表土	4	洪武通寶	o	明	1368
135	表土	4	祥符元寶	p	北宋	1009
136	表土	4	永樂通寶	p	明	1408

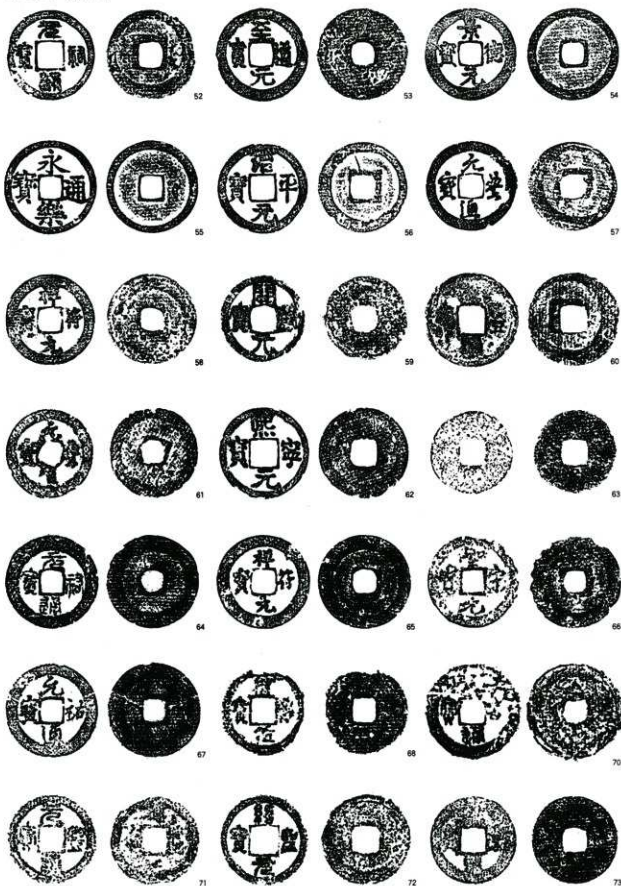
第210図 古銭(1)



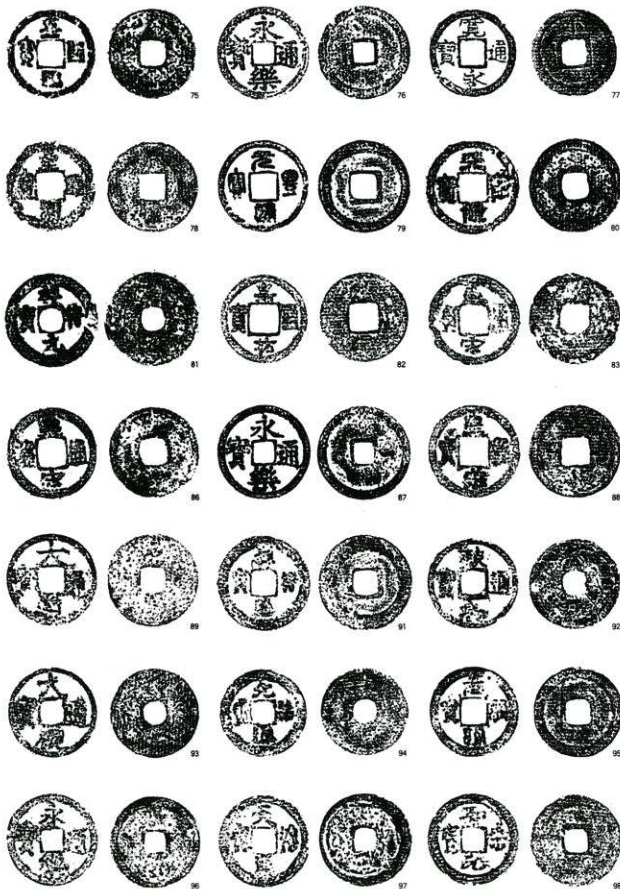
第211图 古钱(2)



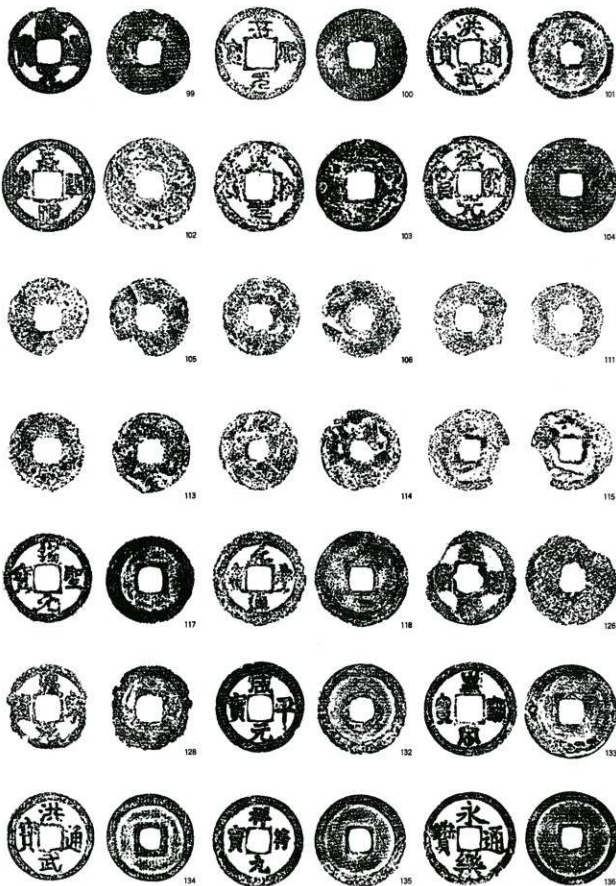
第212圖 古錢(3)



第213图 古钱(4)



第214圖 古錢(5)

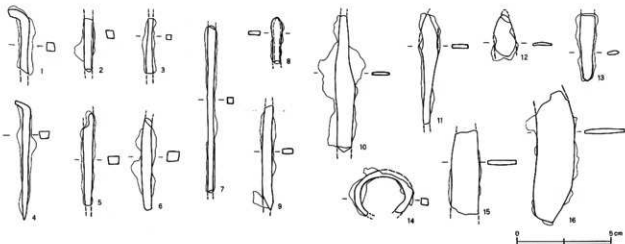


(5) 金属製品(第215図)

多数の中世土壌を中心として、いくつかの遺構から金属製品を検出した。

- 1は、II区表土検出の、鉄釘の頭部であった。
- 2は、IV区表土検出の、両端を欠く鉄釘であった。
- 3は、II区SK-12検出の、両端を欠く鉄釘であった。
- 4は、II区SJ-3覆土から検出した、ほぼ完形の鉄釘であった。住居跡と重複した土壌から混入したものと考えられる。
- 5は、II区SK-114検出の、両端を欠く鉄釘であった。
- 6は、III区井戸上層検出の、上端を欠く鉄釘であった。
- 7は、II区SK-114検出の、両端を欠く鉄釘であった。
- 8は、II区SK-8検出の、鉄鎌の先端部であった。
- 9は、II区SK-18検出の、両端を欠く鉄釘であった。
- 10は、II区SK-51から検出し、両端を欠く刀子と考えられる。
- 11は、II区表土検出の、両端を欠く刀子であった。
- 12・13は、ともにII区SK-49から検出し、刀子と考えられる。
- 14は、II区SK-211から検出し、金属の刃を木製の柄に装着した際の止め金具であると考えられる。
- 15は、II区SK-72から検出し、両端を欠く刀の刃と考えられる。
- 16は、II区SK-40から検出し、鎌の刃の先端部と考えられる。

第215図 金属製品



(6) 瓦(第216図)

- 1は、軒丸瓦の瓦頭部分であった。

瓦頭文様は左巴尾を長く引いていた。成形は、瓦頭面に押し当てる円盤の周りに粘土板を巻いてつくられていた。後に丸瓦を接合していた。色調はやや灰色味を帯びた淡い褐色で、内部は淡い橙褐色を呈していた。胎土中には酸化鉄、砂粒を含んでいた。白色針状物質や石英などの顕著な含有は見られなかった。

出土地点はIV区の第1号井戸跡であった。

- 2は、軒平瓦の瓦頭部分であった。

瓦頭文様は下を向いたやや幅広の剣頭文で構成されていた。輪郭は陽刻されていた。7つの剣頭による瓦頭文様が考えられる。成形は、瓦頭に粘土を押しつけ、上から平瓦部分を張り付けて作られており、縁部分を後から張り付けた痕跡は認められなかった。胎土は、1と同様に酸化鉄と砂粒を中心としていた。色調は、表面が灰褐色で、内面は淡い褐色であった。

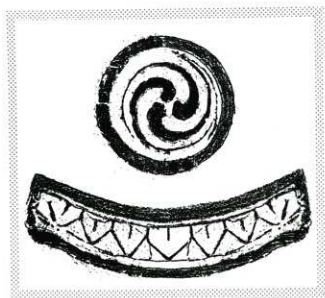
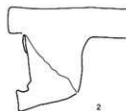
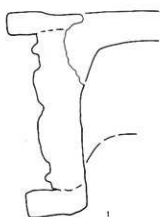
出土地点は1と同様にIV区の第1号井戸跡であった。

- 3は、鬼瓦の一部分であった。

縁辺部の施文を棒状工具の印刻により表現していた。裏面は剝離しており、本来の厚みは不明であった。全体的に丁寧な指ナデを施していた。一部工具の差込などによる造形の跡が認められた。色調は、表面が暗灰色、器内が灰褐色で、胎土は還元した鉄、石英、砂粒等を含んでいた。

出土地点はSK-106の覆土であった。

第216図 瓦



古代の製鉄関連遺物

菅原遺跡からは、II区を中心として製鉄・鋳造関連遺物が大量に出土した。ここでは、これらの製鉄関連遺物を一括して報告した。

既述のように製鉄関連遺物は、その大部分がII区から出土し、ごく僅かのものが隣接するI区とIII区からも出土した。

検出できた製鉄関連遺物には、鋳型、羽口、トリベ、炉の破片、鉄滓などがあげられる。

獣脚正面鋳型(第217～230図)

菅原遺跡での獣脚の鋳造は、容器とは別工程で行われていたと考えられる。

獣脚はその断面が「U」字形を呈しているの、その鋳型は、U字形の正面の鋳型と、板状の蓋である背面の鋳型から構成されていた。

獣脚正面の鋳型は立方体で、外側にはヘラケズリが顕著に認められた。内側の湯が「あたる部分」には一般的に還元面が認められたが、真土と呼べるような他と材質の異なる砂質の部分は認められなかった。外側には、被覆による還元面、被覆による弱い酸化面、露出による強い酸化面の各種が認められ、被覆に用いられた粘土が残存するものも認められた。

獣脚正面の鋳型は、各種の大きさのものが認められたが、全長が想定できる個体は希で、ほとんどが微細な破片であった。従って、類型化は行わなかった。

また、他の遺跡に認められるような、短脚のものや、断面が表現されたものは検出できなかった。

大部分の個体には、指と爪の明瞭に表現されていたが、中にはこれらが省略されたものや、省略されつつあるものも認められた。

第217図～227図は実測図、第228図～230図は実測図に表面状況の分類を記入したものである。

1は、調査区東側のトレンチから検出した。下半部のみ残存しており、両側面は欠落していた。下端は左側のみ残存していた。指の稜線の表現はわずかに認められ、爪の表現もわずかに認められた。内面は還元され、外面は赤化していた。

2は、J-24グリッドから検出した。上端部のみ残存しており、左側側面は欠落していた。外面はヘラケズリが顕著であった。内面は還元され、外面は淡褐色で一部黒変していた。

3は、J-24グリッドから検出した。下半の左側のみ残存していた。外面には粘土の付着が顕著であった。爪と指の表現は全く認められなかった。還元面も下端まで達していなかった。外面は赤化していた。

4は、K-23グリッドから検出した。下半部のみ残存していた。指の稜線と爪の表現は明瞭であった。外面の色調の差異は顕著であった。中央から下半にかけては著しく赤化しており、上方では淡褐色から黒色の部分が認められた。

5は、K-24グリッドから検出した。上端部のみ残存しており、左側側面を欠失していた。鋳型の内面の中心と鋳型の外形の中心が一致しておらず、偏った形りとなっていた。内面は還元され、外面は淡褐色を呈し、一部に黒変が認められた。

6は、I-23グリッドから検出した。上半部のみ残存していた。上端と右側縁は欠失していた。内面は還元され、外面は淡褐色を呈し、一部に黒変が認められた。

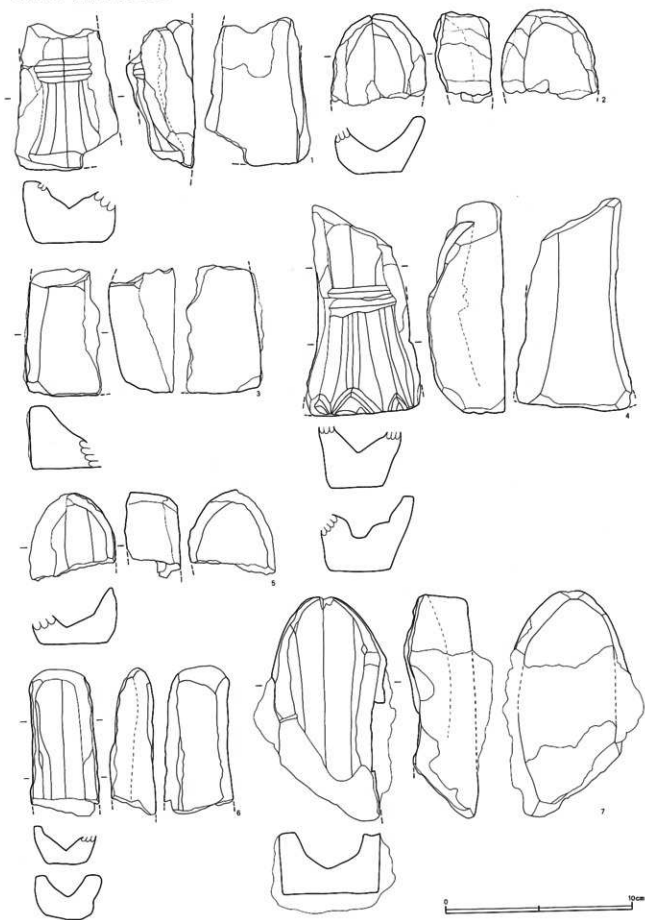
7は、J-24グリッドから検出した。上半部のみ残存していた。外面には帯状に粘土の付着が顕著であった。内面は還元され、外面は褐色を呈し、上端部では灰褐色を呈していた。

8は、I-24グリッドから検出した。上端部のみ残存していた。内面は還元され、外面は黒変していた。外面はヘラケズリ成形が顕著であった。

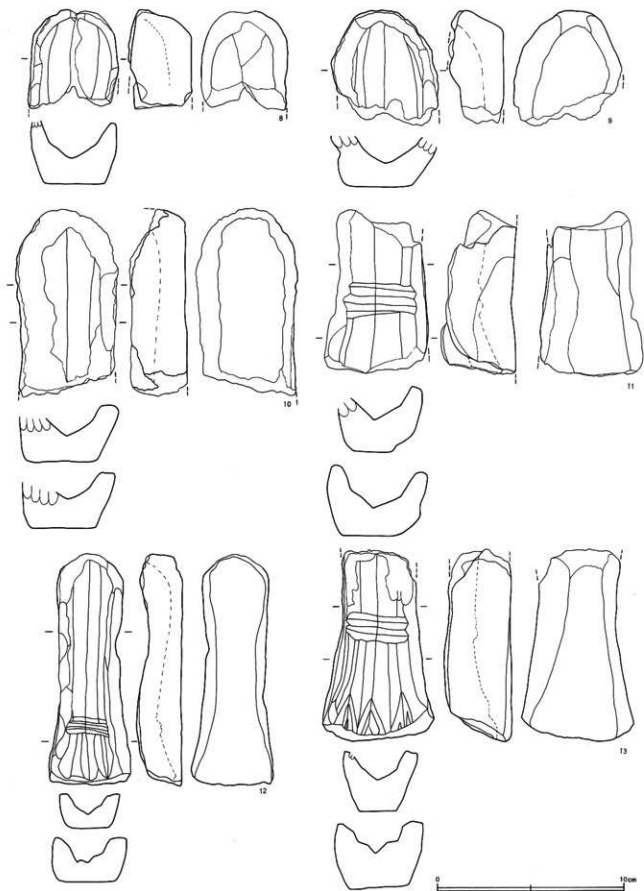
9は、I-23グリッドから検出した。上端部のみ残存していた。内面は還元され、外面は淡褐色から灰褐色を呈していた。

10は、K-24グリッドから検出した。上半部のみ残存していた。側縁はほぼ欠失していた。内面は二次被熱によって脆弱になっていた。内面は還元され、外面は褐色を呈し、一部に帯状に赤変した部分が認められた。

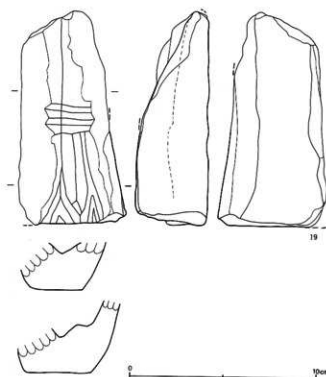
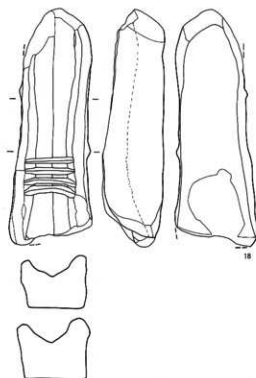
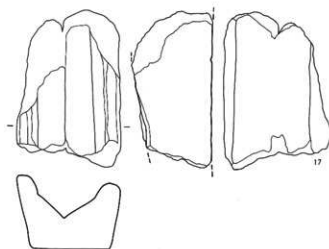
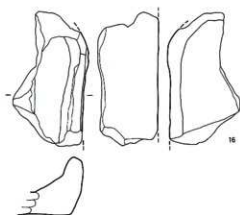
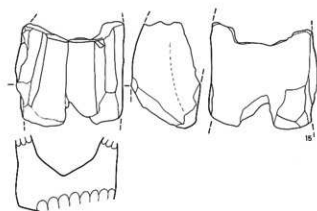
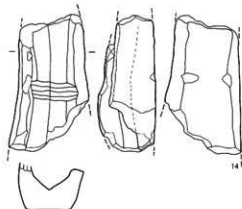
第217図 獣脚正面鑄型(1)



第218図 獸脚正面鑄型(2)



第219図 獣脚正面鋳型(3)



0 10mm

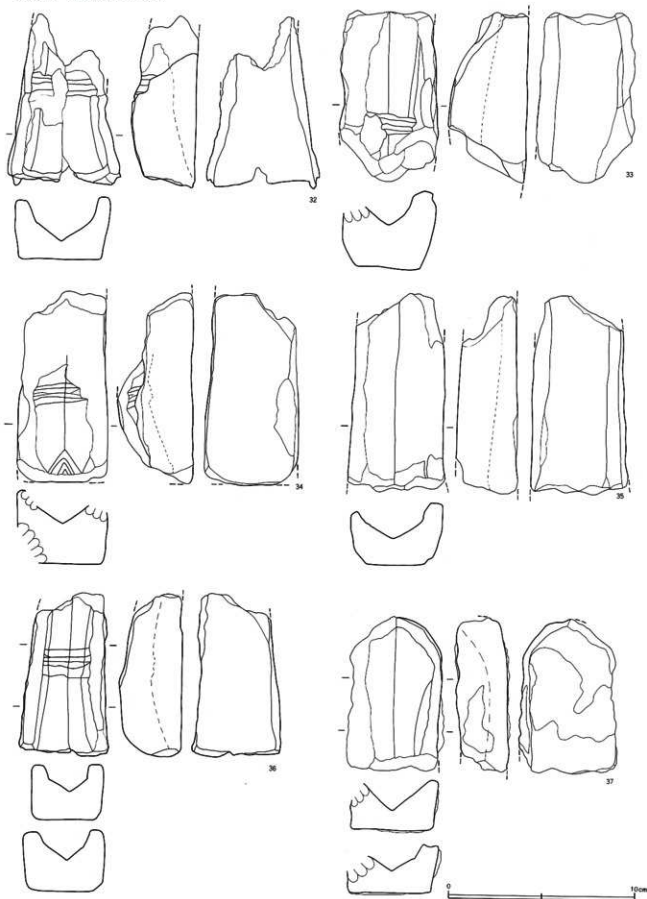
第220図 獣脚正面鑄型(4)



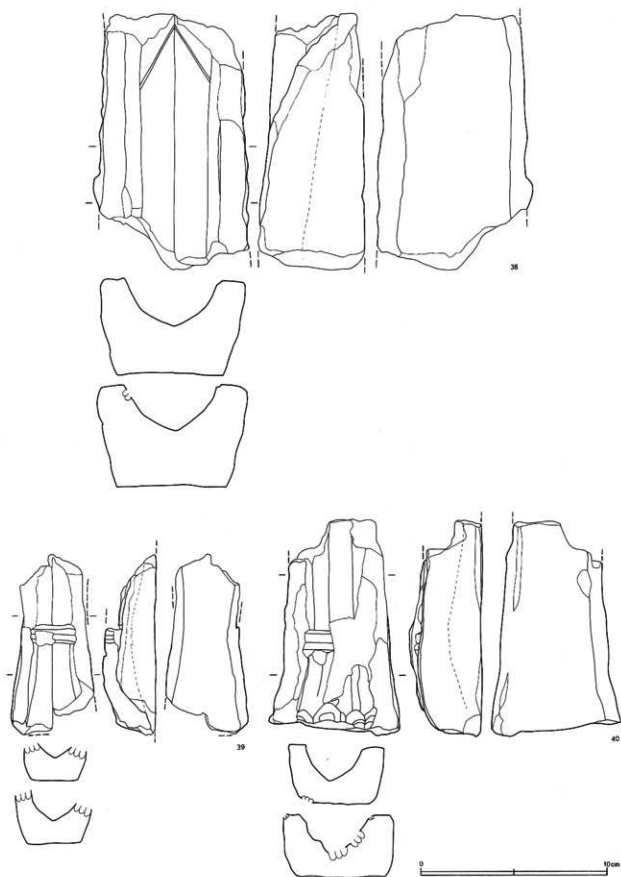
第221図 獣脚正面鋳型(5)



第222図 獸脚正面鑄型(6)



第223図 獣脚正面鋳型(7)



第224図 獣脚正面鋤型(8)

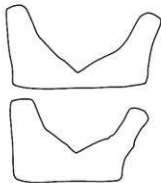
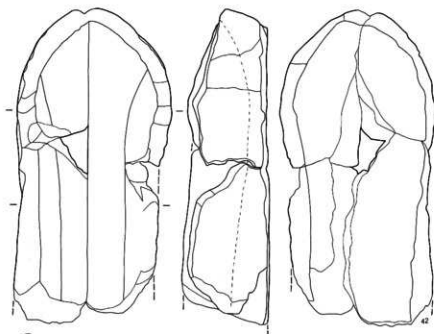
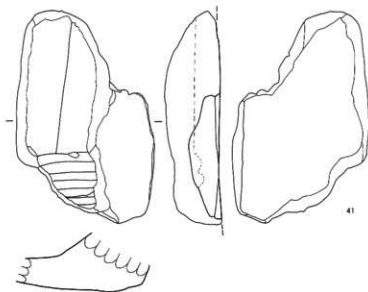
11は、J-24グリッドから検出した。中央部から下半部のみ残存していた。内面はかなり黒変していた。外面は赤褐色を呈していた。指の稜線の表現は省略されていた。爪の表現も省略されていた。

12は、M-22グリッドから検出した。ほぼ完形で残存していた。小形の獣脚で、指の稜線の表現はやや明瞭で爪の表現はやや不明瞭であった。内面は還元され、外面は赤褐色を呈しながらも、先端部裏側から両側縁にかけて褐色の部分か認められた。

13は、J-27グリッドから検出した。中央から下半部のみ残存していた。指の稜線、爪ともに表現は明瞭であった。特に爪の表現は長く顕著であったが、内面の還元面から想定すると、湯が先端にまで達しておらず、爪の表現の半分程度まで鋤込まれていた。内面は還元され、外面は赤褐色を呈していた。

14は、I-24グリッドから検出した。中間部分のみ残存していた。指の稜線の表現は不明瞭であった。内面は還元され、外面は淡褐色で部分的に赤褐色を帯びていた。また、外部背面の二ヶ所に窪みか認められた。

15は、J-24グリッドから検出した。下端部のみ残存していた。指の稜線、爪ともに表現は省略されていた。内面は還元され、外面は赤色を呈しており、



部分的に黒変していた。

16は、I-24グリッドから検出した。上端部右側のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈しており、部分的に赤変していた。

17は、J-24グリッドから検出した。中間部のみ残存していた。内面は還元され、外面は赤褐色を呈していた。

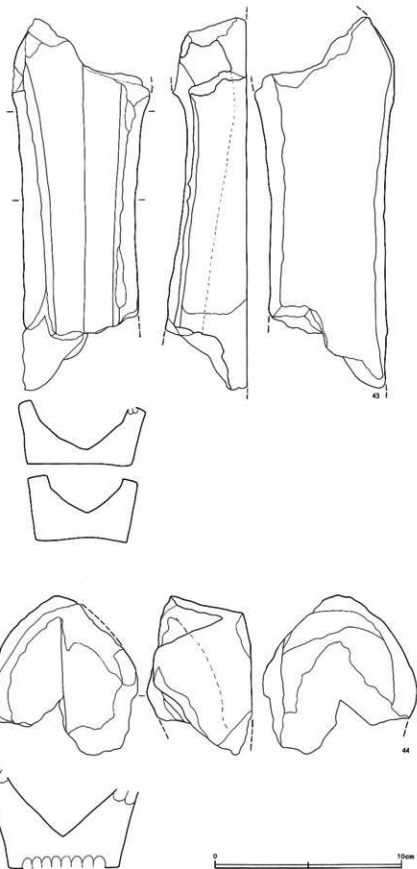
18は、1号炉前庭部から検出した。上端と下端を僅かに欠失していた。指の稜線、爪の表現は省略されていた。側面に粘土の付着が顕著であった。内面は還元され、外面は褐色を呈しており、一部赤変していた。内面の上方には、微細なひび割れが顕著に認められた。このひび割れは、外面には達していなかった。

19は、J-24グリッドから検出した。中央から下半部が残存していた。指の稜線、爪の表現は明瞭であった。内面は還元され、外面は褐色を呈し、一部赤変していた。

20は、J-24グリッドから検出した。中央部分のみ残存していた。指の稜線の表現は明瞭であった。内面は還元され、外面は赤褐色を呈していた。

21は、K-24グリッドから検出した。先端部のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈しており、一部

第225図 獣脚正面鑄型(9)



赤変していた。

22は、谷部から検出した。中央部分のみ残存していた。内面は還元され、外面は赤褐色を呈していた。

23は、J-23グリッドから検出した。下端のみ残存していた。指の稜線の表現は長く明瞭な浮き彫りて、下端でやや広がり、爪の表現は痕跡程度認められた。内面は還元され、外面は赤褐色を呈していた。

24は、K-24グリッドから検出した。上半部のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈しており、先端の部分は黒変し、中央の部分は赤変していた。

25は、K-24グリッドから検出した。下端のみ残存していた。指の稜線の表現は明瞭であった。内面は還元され、外面は加飾を呈していた。鋳型の内面の彫り込みの中心は、鋳型の外形の中心と一致しておらず、やや左側に偏っていた。

26は、I-24グリッドから検出した。上端のみ残存していた。内面は還元され、外面は淡褐色を呈していた。内面には、金属の酸化皮膜と考えられるものの付着が認められた。

27は、J-23グリッドから検出した。上半部のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈し、先端部分では黒変し、中央部分では赤変していた。

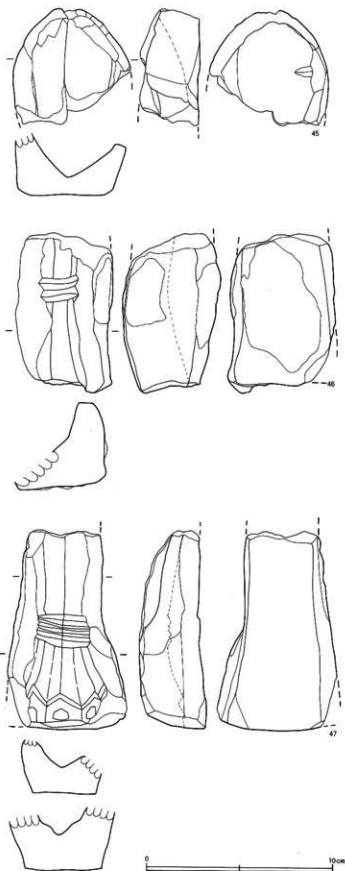
28は、I-23グリッドから検出した。上端部のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈していた。

29は、SJ-9の覆土から検出した。上端部のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈していた。

30は、J-24グリッドから検出した。下端部のみ残存していた。指の稜線、爪ともに表現は明瞭であった。内面は赤褐色を呈し還元面とはなっていないかった。外面も同様に赤褐色を呈していた。

31は、I-24グリッドから検出した。下半部の

第226図 獣脚正面鋳型(10)



み残存していた。指の稜線、爪ともに表現は明瞭であった。非常に硬質であった。内面上半部には微細な亀裂が認められた。

32は、I-24グリッドから検出した。下端部のみ残存していた。指の稜線、爪の表現は省略されていた。内面は還元され、やや剥落が認められた。外面は褐色で一部赤変が認められた。

33は、K-23グリッドから検出した。中間部のみ残存していた。内面に鉄滓の付着が認められた。内面は還元され、外面は赤褐色を呈していた。指の稜線は明瞭に表現されていた。

34は、表土から検出した。下半部のみ残存していた。指の表現は省略されていた。指の稜線の表現も省略されていた。爪の表現は明瞭であった。内面は還元され、外面は赤褐色を呈していた。

35は、表土から検出した。中央部分のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈しており上方では黒変し、下方では赤変していた。

36は、J-23グリッドから検出した。下半部のみ残存していた。指の稜線、爪ともに表現は省略されていた。内面には下端まで湯があたらずに、二重の横線以下の半分程度までが還元され、それ以下は橙褐色を呈していた。外面も橙褐色を呈していた。

37は、H-24グリッドから検出した。上端部のみ残存していた。外面には粘土の付着が顕著であった。内面は還元され、外面は褐色を呈し、一部赤変していた。

38は、SJ-6の覆土から検出した。中間部分のみ残存していた。内面の上方に山形の線が浮き彫りて認められた。内面は還元され、外面は褐色を呈し、一部赤変が認められた。

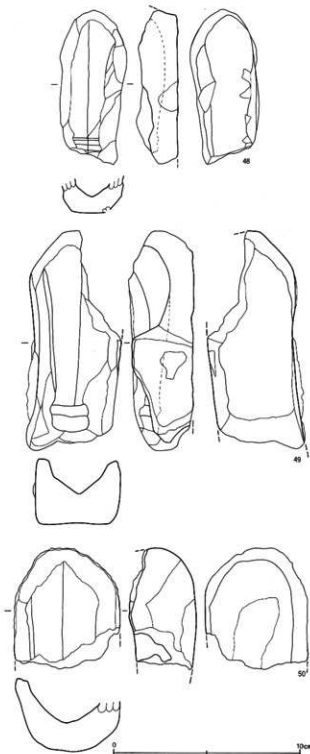
39は、J-24グリッドから検出した。中間部分のみ残存していた。指の稜線、爪の表現とも省略されていた。内面は黒変しており、外面は橙褐色を呈していた。

40は、SD-2覆土から検出した。下半のみ残存していた。指の稜線、爪の表現とも明瞭であった。内面は還元され、外面は赤変していた。内面の下半部は剥落が顕著であった。

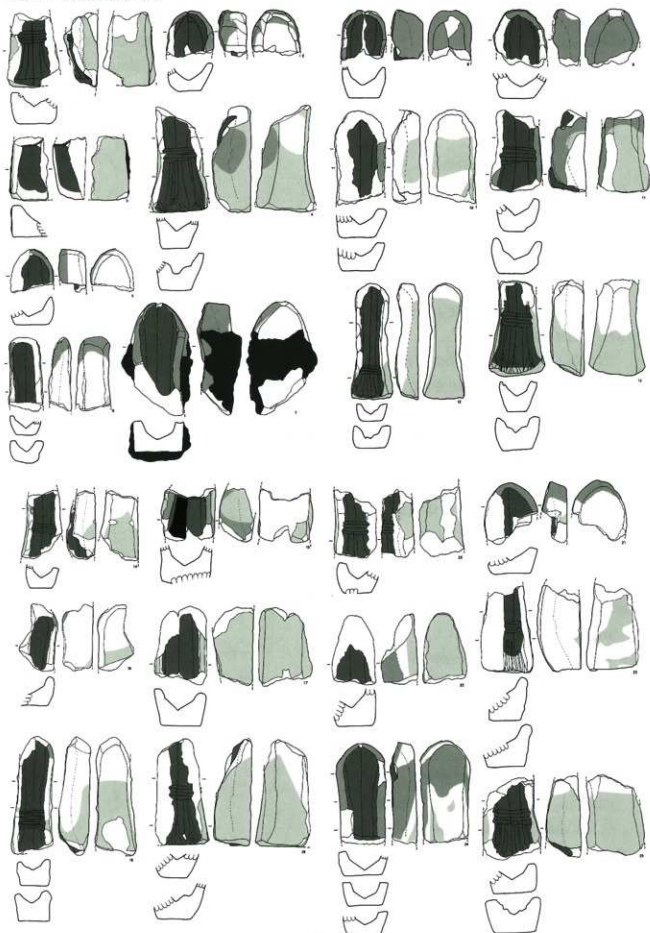
41は、J-24グリッドから検出した。中間部分のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈していた。足首部分の横線は三重に彫られていた。

42は、K-24グリッドから検出した。上半のみ残存していた。二次被熱によりかなり脆弱になっていた。

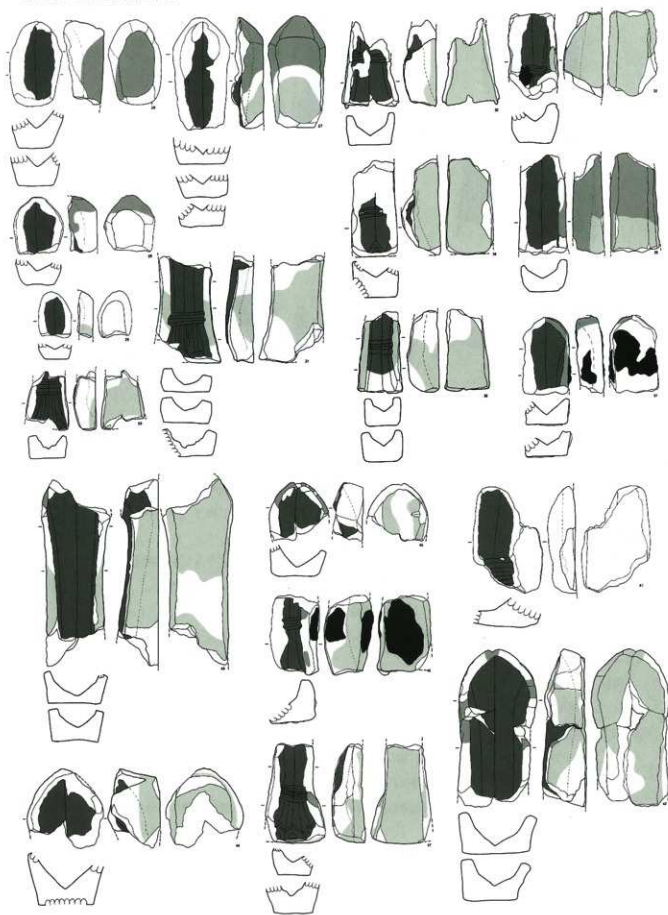
第227図 獣脚正面鋳型(11)



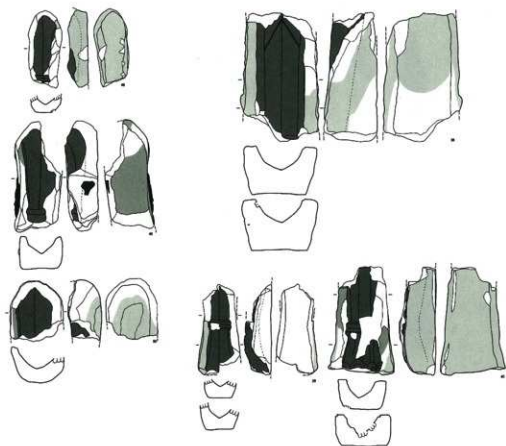
第228図 獣脚正面鋳型(12)



第229図 獣脚正面鋳型(13)



第230図 獣脚正面鋳型(14)



内面は還元され、外面は褐色から黒色を呈していた。

43は、K-23グリッドから検出した。中央部分のみ残存していた。内面は還元され、外面は赤色を呈しており、一部に褐色の部分が見られた。側縁部も上方では褐色を呈し、下方では赤褐色を呈していた。

44は、K-24グリッドから検出した。上端のみ残存していた。内面は還元され、外面は赤褐色を呈していた。側縁部は褐色を呈していた。

45は、J-24グリッドから検出した。上端のみ残存していた。内面は還元され、外面は褐色を呈し、一部赤変していた。

46は、J-23グリッドから検出した。下端のみ残存していた。指の稜線、爪ともに表現が省略されていた。外面には粘土が付着していた。内面は還元され、外面は赤色を呈していた。

47は、I-24グリッドから検出した。中央から下半のみ残存していた。指の稜線、爪の表現は明瞭であっ

た。内面は還元され、外面は褐色を呈していた。指は短く外反が顕著であり、指、爪ともに凹凸が顕著であった。

48は、M-22グリッドから検出した。上半のみ残存していた。内面は赤褐色を呈し、外面も赤褐色を呈していた。

49は、J-24グリッドから検出した。上半のみ残存していた。外面には粘土が付着していた。内面は上方が還元され、横線周辺は赤変していた。外面は褐色を呈しており、一部黒変していた。

50は、K-24グリッドから検出した。上端のみ残存していた。内面は還元され、外面は淡褐色を呈し、一部橙褐色を呈していた。

以上の獣脚正面の鋳型について、特に注目される事は、鋳型の足の裏側が開放になっており、ここから湯が流し込まれていた事である。菅原遺跡の獣脚鋳型は全てこのように作られていた。

獣脚背面鋳型(第231~235図)

獣脚の鋳造は、前述した獣脚正面鋳型と獣脚背面鋳型を、組み合わせて行ったと考えられる。

獣脚正面鋳型が、羊羹状の立方体に獣脚の形をU字型に陰刻したものであるのに対して、獣脚背面の鋳型は、このU字型に開いた部分にかぶせる板状の蓋となっていた。

獣脚背面の鋳型は、湯があたらない外側にはヘラケズリとその後のナデが、側面にはヘラケズリが認められた。又、湯が当たる内面には、指ナデの痕跡と、それ以前の工程によってつけられたと考えられる指頭王痕が認められた。この指頭王痕は外面にはあまり強い痕跡は認められず、内面に特徴的なもので、中にはこの痕跡が、非常に明瞭なものもあった。

獣脚背面の鋳型は、獣脚正面の鋳型と組み合わせて使うものである以上、正面鋳型との接触部分の合わせが必要であり、この合わせを行う際に、より形態変化を行い易い獣脚背面鋳型の方に対して、変形加工を行ったと考えられる。

つまり、獣脚背面鋳型を板状につくり、可塑性がある時点で正面の鋳型に押しつけ、合わせ部分の曲面を作ったと想定される。

したがって、獣脚正面の鋳型に接する外周側縁部分は凹み、内側はやや突出していた。

また、使用後は、内側のやや突出した部分には強い還元面が認められ、外周側縁部分には弱い還元面があるいは、弱い酸化面が認められた。

獣脚正面の鋳型と同様に、真土と呼べるような他と材質の異なる砂質の部分は認められなかった。

更に、獣脚背面の鋳型も、各種の大きさのものが認められたが、全長が想定できる個体は希で、ほとんどが微細な破片であった。従って、類型化は行わなかった。

第231図~235図は実測図、第231図~235図は実測図に表面状況の分類を記入したものである。

1は、K-23グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面の一部は還元され、外面の一部は黒

変していた。内面には布圧痕が認められた。外面にはヘラケズリが認められ、粘土が若干付着していた。

2は、H-25グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面は還元されていた。

3は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに橙褐色を呈していた。内面には還元された痕跡が認められなかった。正面鋳型と組み合わせて強く圧迫されており、正面鋳型の窪みの部分が強く湾曲して突出していた。

4は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに橙色を呈し、側縁部分と外面の一部が赤変していた。内面には還元された痕跡が認められ、外面には粘土が付着していた。内面の還元された痕跡には、皮膜状の鉄化合物が認められた。

5は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。

6は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。

7は、表土から検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面には、粘土の付着も認められた。

8は、表土から検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。

9は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。内面の作りはやや雑で、凹凸が認められた。

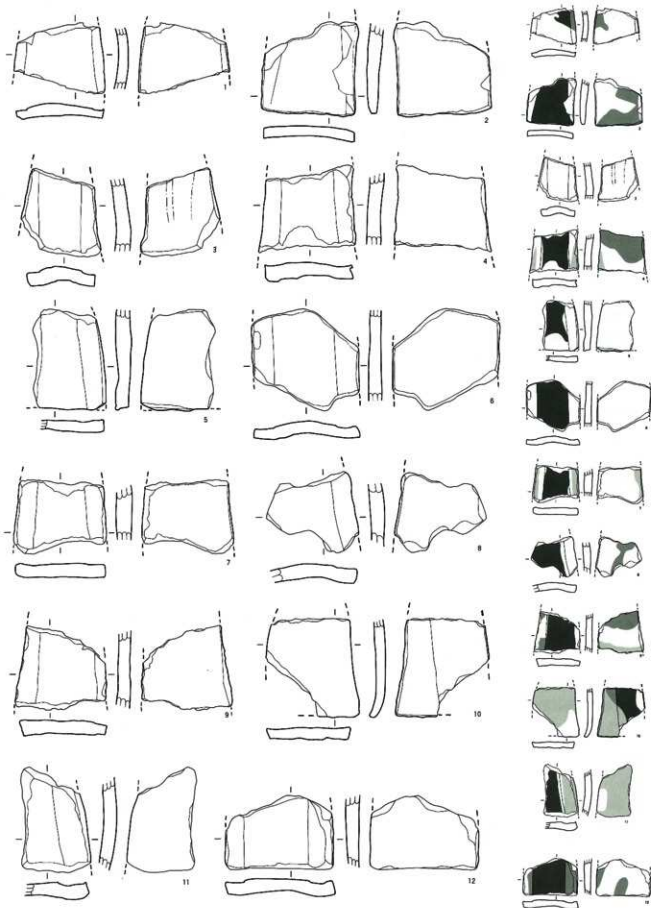
10は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに橙褐色を呈し、外面は一部黒色を呈していた。内面には還元された痕跡が認められなかった。

11は、K-24グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面には粘土の付着が認められた。

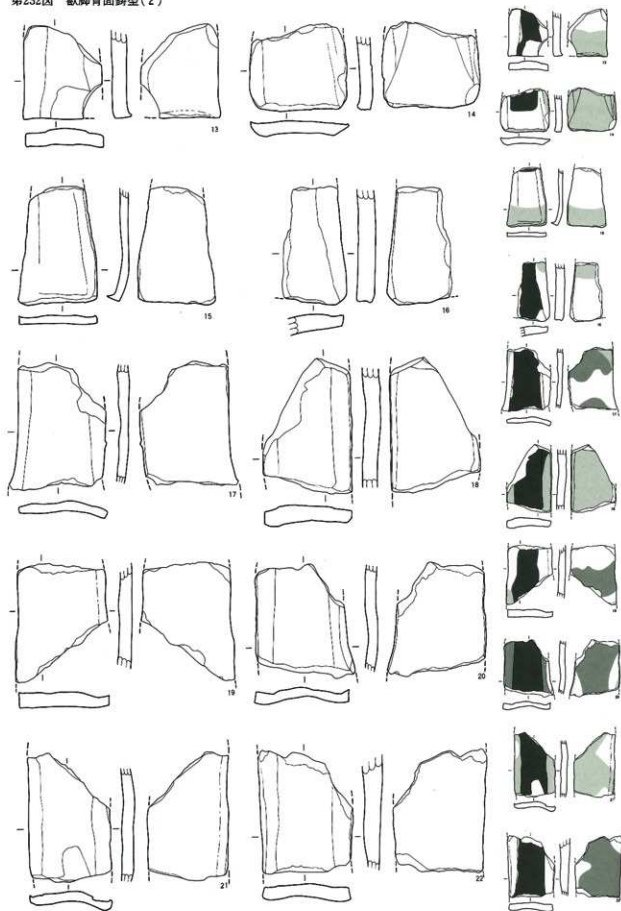
12は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が広範囲に認められた。外面には粘土が多少付着していた。

13は、K-23グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。

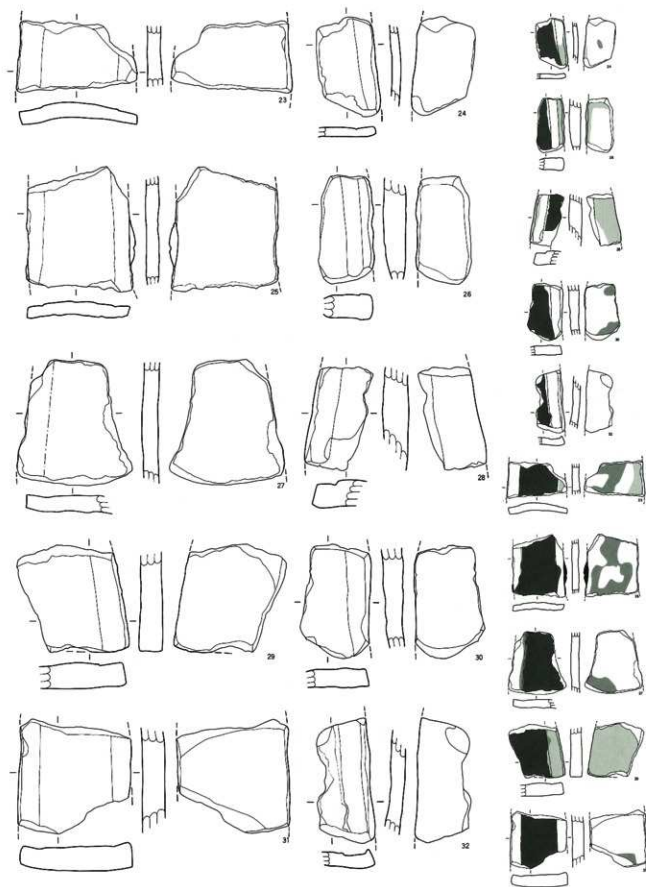
第231図 獸脚背面鑄型(1)



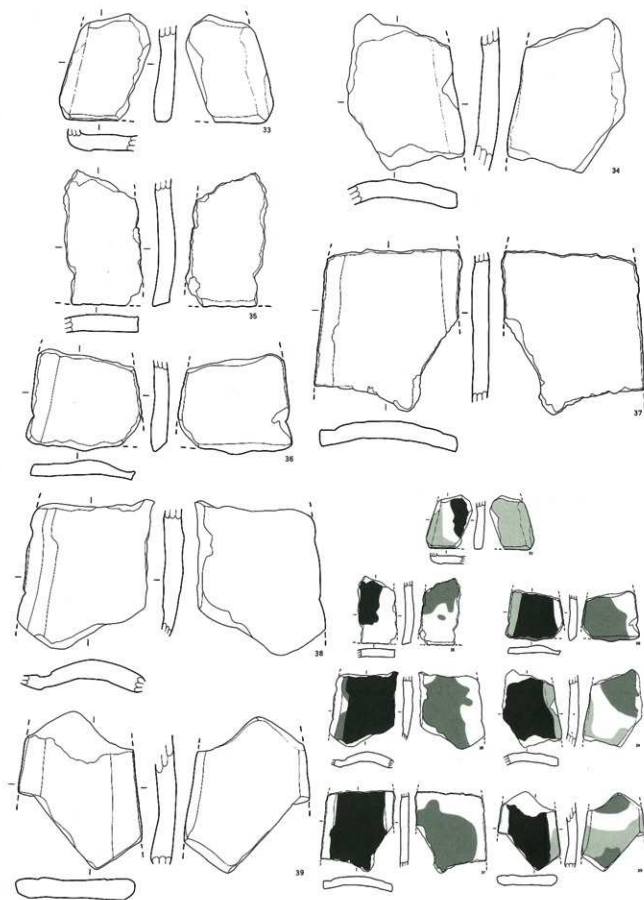
第232図 獣脚背面鉢型(2)

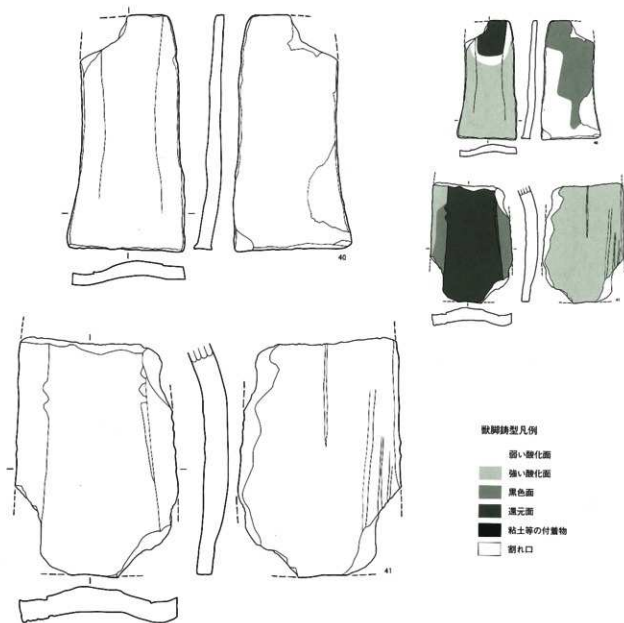


第233図 獣脚背面鑄型(3)



第234図 獣脚背面鑄型(4)





14は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面には粘土の付着が若干認められた。

15は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、下端は赤褐色を呈していた。内面に還元された痕跡は認められなかった。

16は、K-24グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面と側面には若干の粘土の付着も認められた。

17は、K-24グリッドから検出した。内外面ともに

淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面にも下方に還元された痕跡が、上方に黒変と赤変が認められた。非常に薄く作られていた。

18は、表土から検出した。内外面ともに橙褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。

19は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに灰褐色を呈し、外面には黒変が認められた。内面には還元された痕跡と布圧痕が認められた。

20は、I-24グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。

外面には黒変が認められた。非常に薄く作られていた。

21は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡と布圧痕が認められた。外面には、黒変と赤変、及び粘土の付着が認められた。

22は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面はやや黒変が認められ、粘土の付着も認められた。

23は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面はやや黒変が認められた。

24は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。非常に薄く作られていた。

25は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面には縦位のしわが顕著であった。

26は、I-24グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面と側面には粘土の付着が認められた。

27は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面には粘土の付着が認められた。

28は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。

29は、K-24グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。内面には鉄滓の付着も認められた。

30は、K-23グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面には亀裂が多数認められた。

31は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。内面の還元面と酸化面との境界に段差が認められなかった。

32は、J-28グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。

内面の側縁部には、正面鋳型のあたりによる窪みが認められた。

33は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。内外面ともに布圧痕も認められた。

34は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、一部赤変していた。内面には還元された痕跡が認められた。外面には、鉄滓の付着が認められた。

35は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面は一部黒変が認められた。

36は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面は一部黒変が認められた。内面には布圧痕も認められた。

37は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面には黒変が認められた。内面には縦位のしわが多数認められた。

38は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡が認められた。外面には黒変が認められた。背面には指頭圧痕が顕著に認められた。

39は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面には還元された痕跡と赤変が認められた。外面には黒変と赤変が認められた。外面と内面の側縁部に粘土の付着が認められた。

40は、I-24グリッドから検出した。内外面ともに淡褐色を呈し、内面上端部には還元された痕跡が、中位から下位にかけては、赤変が認められた。外面は黒変が認められた。内面には布に覆われた指頭の圧痕が顕著に認められた。外面には粘土の痕跡が認められた。

41は、J-23グリッドから検出した。内外面ともに赤褐色を呈し、内面には還元された痕跡と黒変が認められた。外面には黒変が認められた。内面には布圧痕が顕著に認められた。

角柱外型鋳型(第236～240図)

角柱外型としたものは、高さ4～5cm程度、幅3～5cm程度、厚さ8mm程度で、幅方向の左右両端に割れ口を持つ鋳型である。

本来は四角形の箱型を呈し、中子と組み合わせて鋳造に使用し、おそらくは器の脚として用いられるであろう、中空の四角柱の製品を作る鋳型と考えられる。

外面に僅かに手捏ね痕を残し、上方は酸化して橙色、下方は還元されて灰色を呈するものが多かった。

内面は平滑に作られているが、表面はやや荒れていた。やはり上方に僅かに酸化面を持ち、それ以外の部分では、還元面となっていた。

端部については、上方の端部は多くの場合酸化面であり、下方の端部は還元面となっておりしばしば砂の付着が認められた。

他の製鉄関連遺跡では、猿貝北遺跡に完形品の類例が認められる。

使用時の鋳型は、四角柱形をしているが、製品を取り出すときに破損を受け、検出時には板状を呈していると考えられる。

菅原遺跡では約300個体検出されたが、この中で2面が接合してL字状になったものが3点であった。

比較的遺存状態の良好な46点を図示した。

1は、I-23グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、下端が黒変していた。下端に痕跡程度の砂の付着が認められた。

2は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、中央から下端にかけてが黒変していた。上端下端ともに、手前側に斜位に整形されていた。

3は、I-24グリッドから検出した。内面は上方が淡褐色で、下方が還元面、外面は淡褐色で、下端が黒変していた。

4は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は灰黒色で、中央付近に粘土付着の痕跡が認められた。

5は、J-23グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上半は橙褐色変し、下半は灰色変

していた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

6は、I-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端は左長右短に斜位に整形されていた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

7は、I-24グリッドから検出した。内面は還元面で、上端まで達しておらず赤変、外面は赤褐色。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

8は、J-24グリッドから検出した。内外面ともに褐色で、内面には明瞭な還元面が認められなかった。

9は、I-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端は黒変していた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

10は、I-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、下端は黒変していた。下端には砂の付着が認められた。形態は、上端の幅が下端の幅に比べて広く、逆位の台形であった。

11は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上端以外が黒変していた。

12は、I-23グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、下端が黒変していた。下端は手前に斜位に整形されていた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

13は、K-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上端は赤変、下端は黒変していた。下端は左短右長に整形されていた。板状の面に直交する面がわずかに残存していた。

14は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上端以外は黒変していた。下端は左長右短に整形されていた。

15は、J-23グリッドから検出した。内面は還元面、外面は黒色で、上下端が褐変していた。下端は左短右長に整形されていた。

16は、I-23グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、下端は黒変していた。下端には砂が付着していた。

17は、K-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は灰色で、下端には砂が附着していた。

18は、K-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

19は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色。下端は手前に斜位に整形されていた。

20は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上端以外は黒変していた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

21は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は灰色で、粘土の附着が認められた。

22は、H-25グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上端は手前に斜位に整形されていた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

23は、I-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、下端は黒変していた。下端は左短右長に整形されていた。

24は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上端は赤変、下端は黒変していた。

25は、G-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端は左短右長に整形されていた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

26は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、中央から下端にかけて黒変していた。下端には砂が附着していた。外面には粘土が附着していた。

27は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は灰黒色で、下端は手前に斜位に整形され、端部には砂が附着していた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

28は、I-23グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端には砂が附着していた。

29は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、中央部は黒変していた。下端には砂が附着していた。

30は、J-23グリッドから検出した。内面は還元

面、外面は明褐色で、上方が赤変していた。

31は、I-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色を呈していた。下方は赤変し、下端は黒変していた。下端は左長右短に斜位に整形されていた。

32は、K-23グリッドから検出した。内面は還元面、外面は赤褐色で、下端は黒変していた。

33は、H-25グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下方は黒変していた。外面には粘土付着の痕跡が認められた。板状の面に直交する面がわずかに残存していた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

34は、K-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、中央付近が黒変していた。板状の面に直交する面がわずかに残存していた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

35は、H-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上下端がわずかに黒変していた。下端は手前に斜位に整形されていた。

36は、K-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端が黒変していた。上端は手前に斜位に整形されていた。下端には砂の附着が認められた。外面全体に縦位のしわがよっていた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

37は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端は黒変していた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

38は、K-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、下端には砂の附着が認められた。

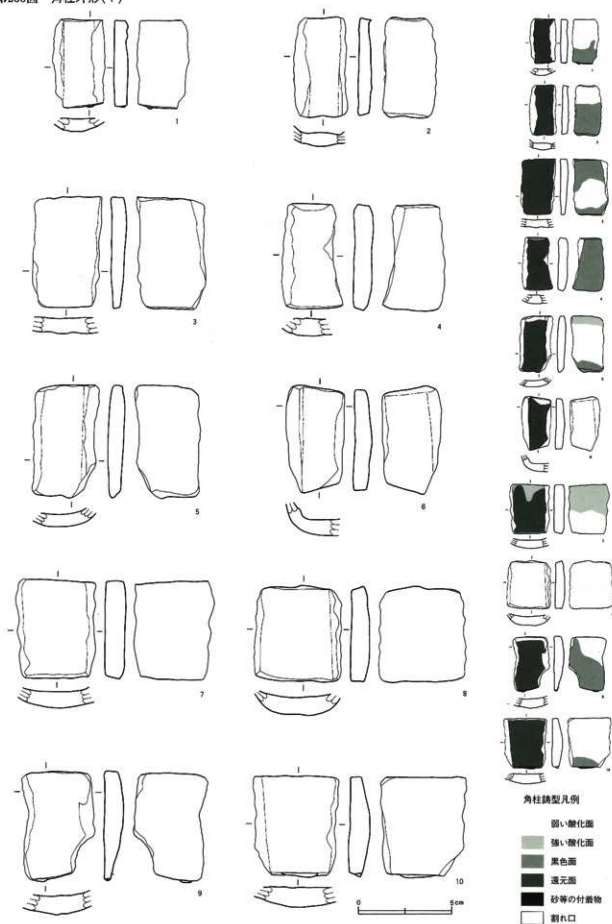
39は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は灰褐色。

40は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は黒色で、板状の面に直行する面がわずかに残存していた。

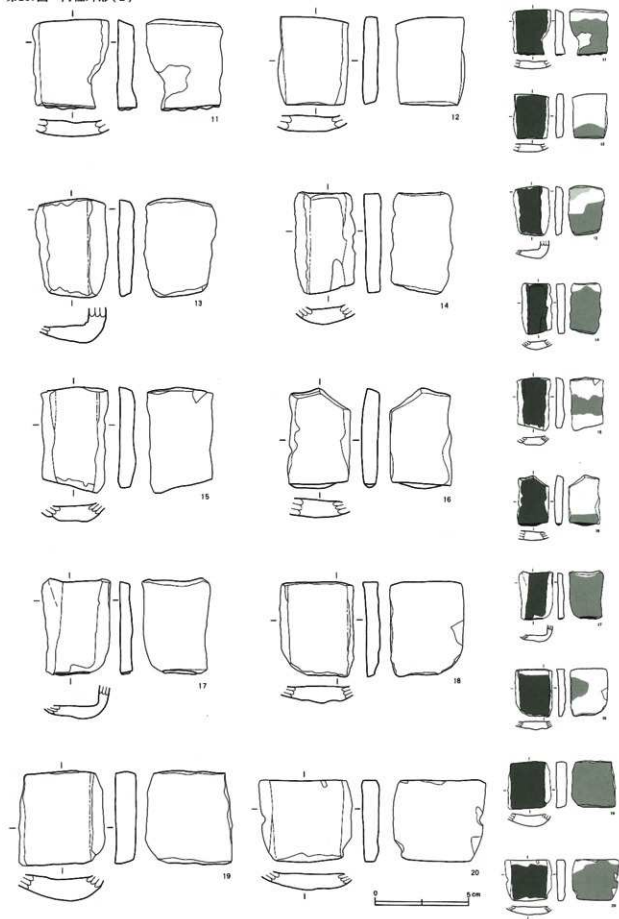
41は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は褐色で、上端は赤変、下端は黒変していた。下端には砂が附着していた。

42は、K-24グリッドから検出した。内面は還元面、

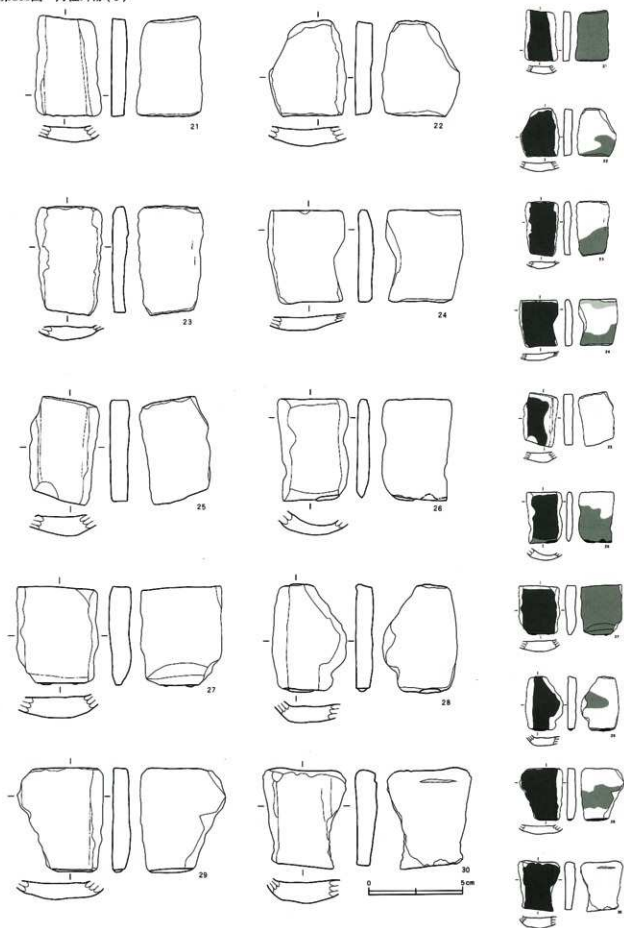
第236図 角柱外形(1)



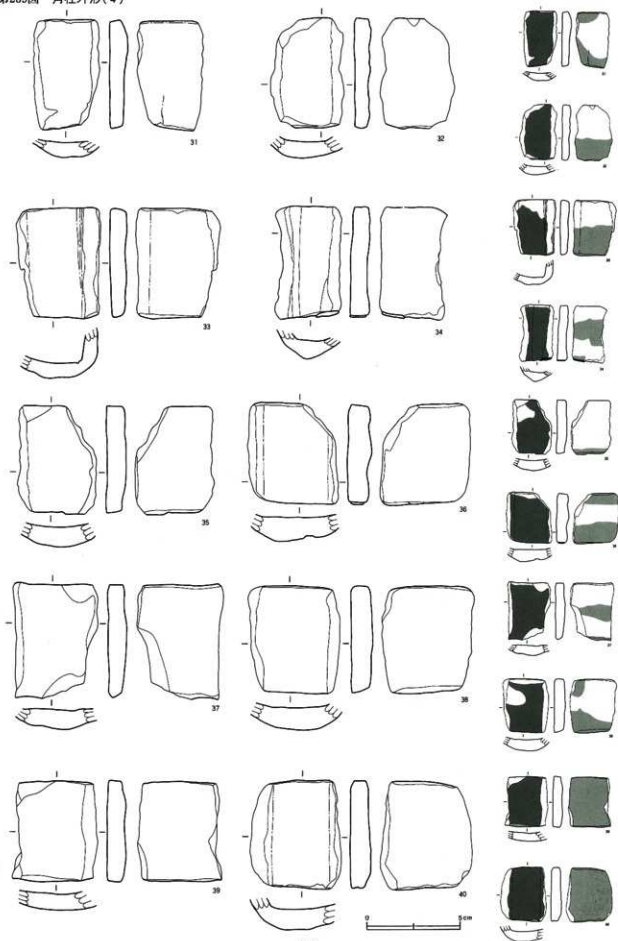
第237图 角柱外形(2)



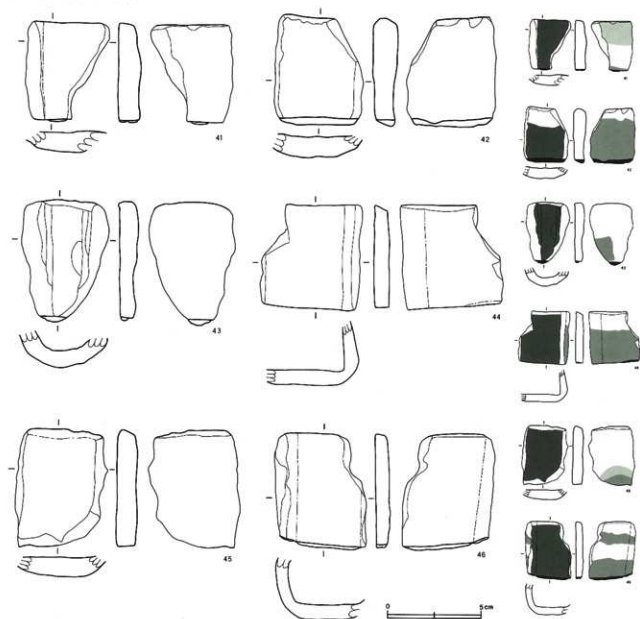
第238图 角柱外形(3)



第239图 角柱外形(4)



第240図 角柱外形(5)



外面は黒色で、下端には顕著な砂の付着が認められた。

43は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端は黒変していた。部分的に粘土の痕跡が認められた。他に比べて細長い作りとなっていた。板状の面に直行する面がわずかに残存していた。

44は、I-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下半は黒変していた。下端には砂の付着が認められた。板状の面に直行する面がわずかに残存していた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

45は、J-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端にはわずかに砂の付着が認められた。内面の還元範囲は上端にまでは達していなかった。

46は、I-24グリッドから検出した。内面は還元面、外面は淡褐色で、下端は黒変していた。外面には鉄滓の付着が認められた。上下端ともに、左上がりに斜位に整形されていた。下端には、砂の付着が認められた。内面の還元範囲は、上端にまでは達していなかった。

角柱中子鑄型(第241~245図)

角柱中子としたものは、摘み状部分の直径3~5 cm×2~3 cm、高さ1.5~2 cm、楔状部分の高さ3 cm、幅2~4 cm、厚さ2~3 cm程度の鑄型であった。

本来は、摘み状部分の上に模型をした台形の四角柱があり、前述の箱型を呈した角柱外型と組み合わせて鑄造に使用し、おそらくは器の脚として用いられていたであろう、中空の四角柱型の製品を作るための鑄型であると考えられる。

摘み状の部分の外表面は、顕著な手捏ね痕を残していた。内面では、楔状の部分との境界に段を持っていた。楔状の部分は、ほとんどの個体で欠落しており、かなり残存しているものが2例のみであった。鑄型の構造上、楔状の中子は、中空の足の中に入り込んだ状態で折り取られ、その後中空の角柱から分離されたと考えられる。

外型と共に猿貝北遺跡に完形品の類例が認められた。ここでは、比較的遺存状態の良い48点を図示した。

1は、K-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

2は、K-23グリッドから検出した。

楔部は半分程度欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに赤褐色。

3は、J-23グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外表面には、わずかに手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

4は、K-23グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、

内外面ともに灰色。

5は、K-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

6は、I-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内面は灰色、外面は淡褐色。

7は、I-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内面は灰色、外面は橙褐色。

8は、I-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

9は、J-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内面は灰褐色、外面は褐色。

10は、J-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに灰色。

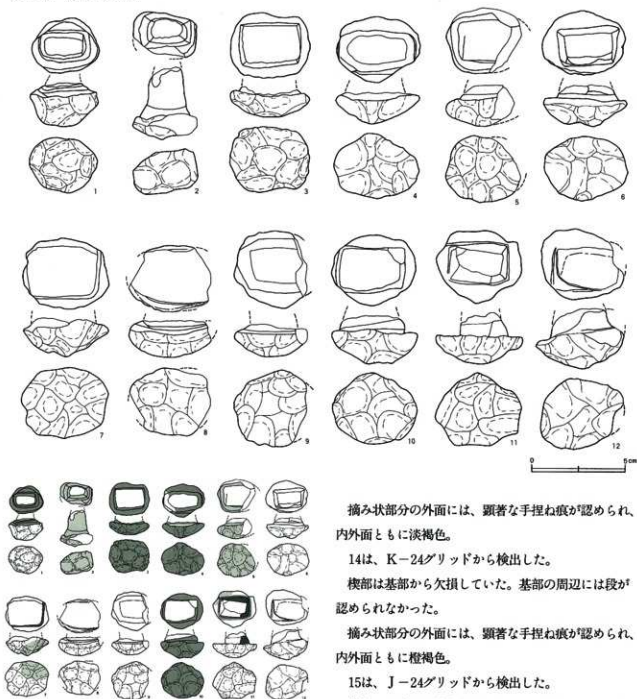
11は、J-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外表面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

12は、I-24グリッドから検出した。

第241図 角柱中子(1)



楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに褐色。

13は、表土から検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

14は、K-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

15は、J-24グリッドから検出した。

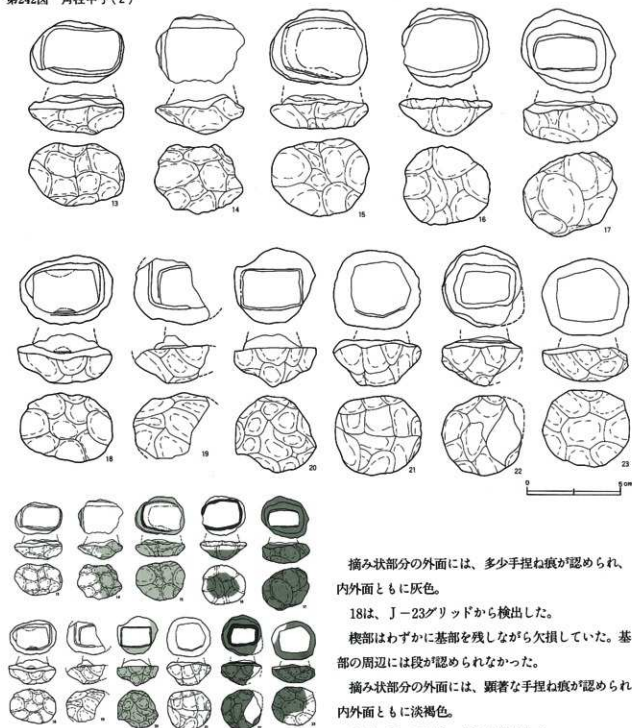
楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに赤褐色。外面に粘土付着の痕跡が認められた。

16は、J-23グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

第242図 角柱中子(2)



摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内面は褐色、外面は灰色。外面に粘土附着の痕跡が認められた。

17は、J-23グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに灰色。

18は、J-23グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

19は、J-24グリッドから検出した。

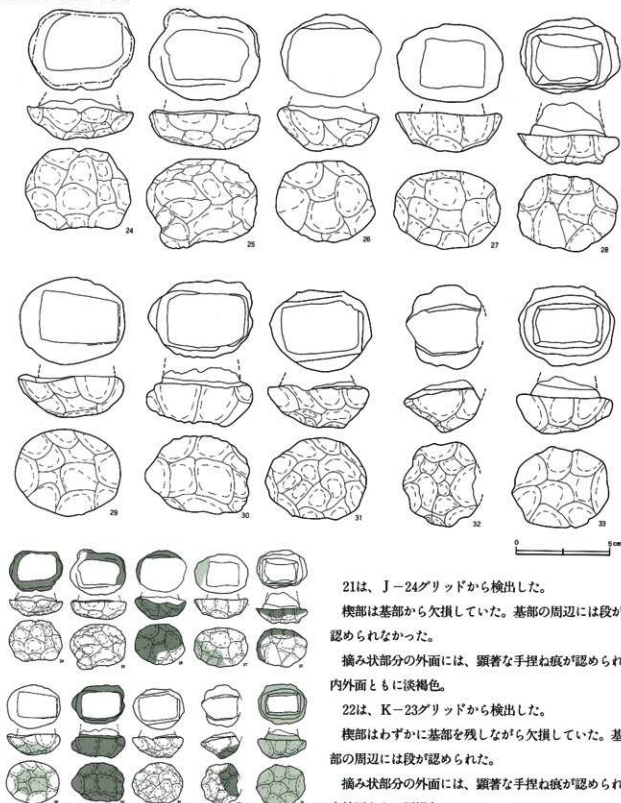
楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに褐色。

20は、J-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基

第243図 角柱中子(3)



部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに赤褐色。

21は、J-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

22は、K-23グリッドから検出した。

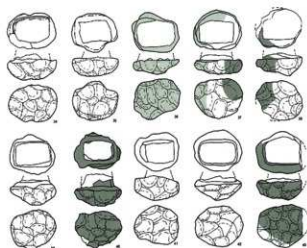
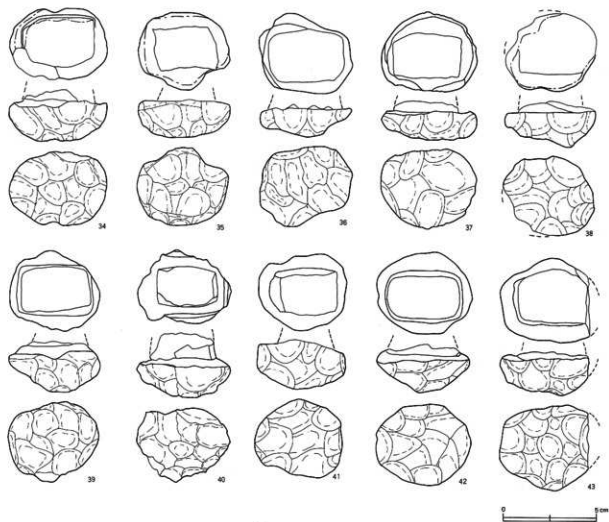
楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに灰褐色。

23は、K-23グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

第244図 角柱中子(4)



摘み状部分の外面には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに灰褐色。

24は、J-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が

認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内面は灰色、外面は褐色。

25は、J-23グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

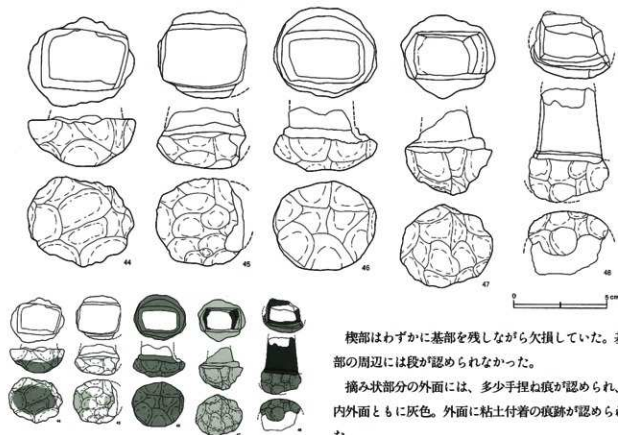
摘み状部分の外面には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに褐色。外面に粘土付着の痕跡が認められた

26は、J-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、多少手捏ね痕が認められ、内面は灰色、外面は褐色外面に粘土付着の痕跡が認め

第245図 角柱中子(5)



られた。

27は、I-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

28は、K-23グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに褐色。外面に粘土付着の痕跡が認められた。

29は、K-23グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

30は、J-23グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに灰色。外面に粘土付着の痕跡が認められた。

31は、J-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

32は、I-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

33は、K-23グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

34は、J-23グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

35は、J-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

36は、K-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

37は、K-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに褐色。

38は、J-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

39は、J-24グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに褐色。

40は、I-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。外面に粘土付着の痕跡が認められた。

41は、J-23グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、多少手捏ね痕が認められ、

内外面ともに灰黒色。

42は、J-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

43は、K-23グリッドから検出した。

楔部は基部から欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに灰黒色。外面に粘土付着の痕跡が認められた。

44は、K-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面上には、多少手捏ね痕が認められ、内面は淡褐色、外面は灰色。

45は、J-23グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められなかった。

摘み状部分の外面上には、多少手捏ね痕が認められ、内外面ともに淡褐色。

46は、J-23グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内面は淡褐色、外面は灰色。

47は、K-24グリッドから検出した。

楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

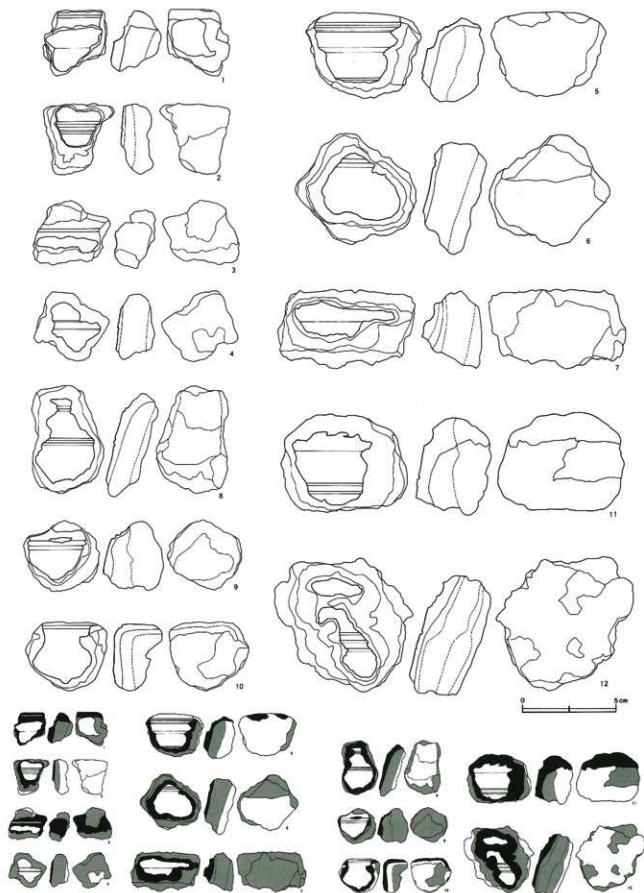
摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに橙褐色。

48は、I-24グリッドから検出した。

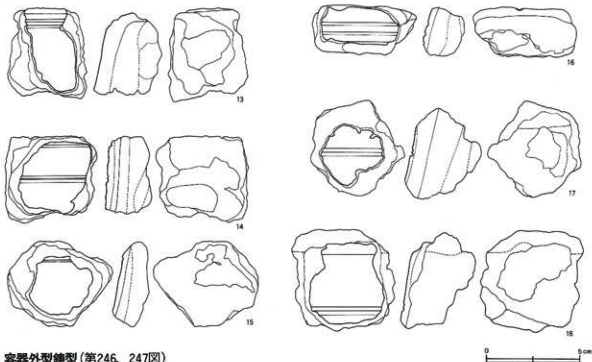
楔部はわずかに基部を残しながら欠損していた。基部の周辺には段が認められた。

摘み状部分の外面上には、顕著な手捏ね痕が認められ、内外面ともに灰黒色。

第246图 容器外形(1)



第247図 容器外形(2)



容器外型類型(第246、247図)

容器外型としたものは、恐らく先に取り上げた獣脚と組み合わせて製品となるものであると考えられる。

外型は、スサ入りの粗い粘土の内面に細かい砂の真土を張り付けたもので、真土は通常1層、まれに内側に粗く、外側に細かい真土が2層使い分けられているものも認められた。

獣脚に比べて、検出個体数は少なかった。

その構造上、容器取り出し時には叩き割られ、更に真土が再利用されている可能性があることが、検出個体数が少ない原因であると考えられる。

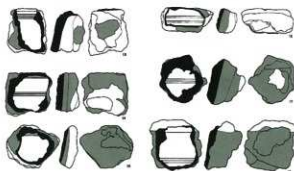
これらの鋳型の中で、2、4、6、15、16、17は、二条ないしは三条の細い沈線が印刻されていた。容器の体部に相当すると考えられる。

また、1、5、9、10、13は、太い沈線とその直上に罎状の張り出しが認められた。容器の口縁に近い罎の部分であると考えられる。

3は細い沈線と太い沈線が認められる事から、罎の直下の部分であると考えられる。

7も太い沈線が認められる事から、罎の直下の部分であると考えられる。

8も二条の細い沈線があり、その上に一条の細い沈



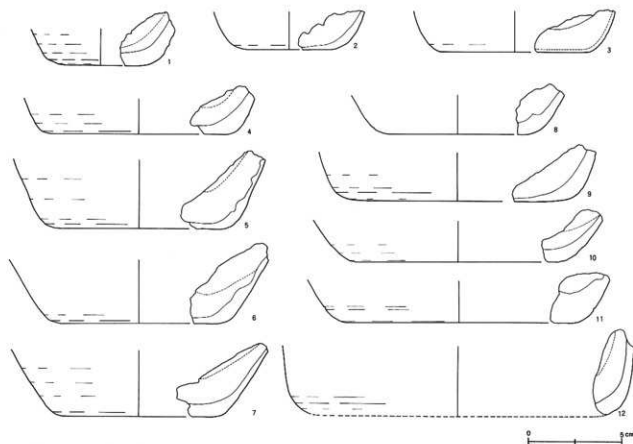
線と太い沈線が認められる事から、罎の直下の部分であると考えられる。

11、12、18ともに、二条の細い沈線とその上に太い沈線が認められる事から同様に罎の直下と考えられる。

14も、細い二条の沈線とやや間隔をおいて一条の沈線が認められ、更にその上では真土が奥に張り出している事からやはり罎の直下の部分であると考えられる。

1、5、7、12、18は、J-23グリッドから検出した。2、3、6、11、13、15、17は、J-24グリッドから検出した。4は、I-23グリッドから検出した。8、9は、I-24グリッドから検出した。10は、K-23グリッドから検出した。14、16は、K-24グリッドから検出した。

第248図 容器中子



容器中子鋳型(第248図)

容器中子は、スサ入りの粗い粘土で中心部がつくられ、湯があたる外側に細かい砂の真土を張り付けたもので、真土は通常1層、まれに内側に粗く、外側に細かい真土が2層使い分けられているものも認められた。

容器外型同様に、獣脚に比べて検出個体数は少なかった。

その理由は容器外型と同様と考えられた。

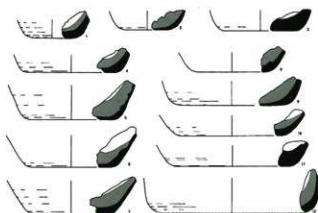
1は、中心部が還元層と酸化層に分かれ、外側に真土が付けられていた。

2、8、9は、中心部が還元層で、外側に真土が付けられていた。

3、11は、中心部が酸化層で、外側に張り付けられた真土が還元層と還元層に分かれていた。

4、5、6、7、10、12は、中心部が酸化層と還元層に分かれ、外側に真土が付けられていた。

2、5、6、7、8、9、12は、K-24グリッドから検出した。1、10は、I-24グリッドから検出した。



容器鋳型凡例



た。3は、J-24グリッドから検出した。4は、表土から検出した。11は、J-23グリッドから検出した。

不明銅型 (第249図)

製品の形態が不明の銅型を一括した。

1～4は、多重の曲線を組み合わせた模様が施された銅型で、いずれも同様な製品の銅型であると考えられる。

3、4では銅型の側面に立ち上がりが見られることから、この銅型によって作られる製品の形態が、浅い円盤状のものであると考えられる。

外面は獣脚同様粗い削りて仕上げられていた。内面では、1、3、4に還元面が認められ、2は酸化面を

呈していた。

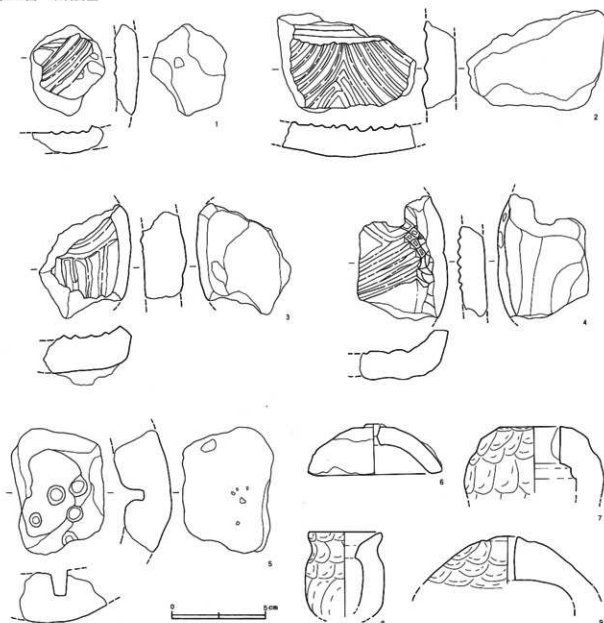
5は、緩やかな傾斜を持った底部内面状の部分に、7mm程度の穴が5ヶ所認められた。外面には多少砂が付着しており、内面の一部に還元面が認められた。

6、7、9は、器を臥せたような形態の銅型で、上端に湯を注ぐ為と考えられる穴が認められた。

8は、紡錘形の製品を作るための銅型であると考えられる。やはり上端に湯の注ぎ口が認められた。

6、7、9が容器の蓋の外形であり、8がこの容器に付けられる摘みの銅型であるとも考えられる。

第249図 不明銅型



半球状土製品 (第250～254図)

半球状土製品としたものは、直径4～5cm、高さ2～3cm程度の幾何型をした土製品であった。

全体に手捏ねで作られており、上面・下面ともに指頭圧痕が認められた。形状は算盤玉状を呈しており、最大径が下方1/3～1/4程度の部分にあった。

作りは極めて雑で、形態も様々であり、形状・大きさとも変化に富んでいた。

胎土はやや砂質で、緻密さを欠き、スサを含んでおり、上半が酸化されて橙色を呈し、下半が還元されて灰色を呈しているものが多かった。また、下半が欠失しているものも多く認められた。

他の製鉄関連遺跡にも類例が認められ、製鉄あるいは、鑄造に関連すると考えられているものである。

菅原遺跡では113個体検出されたが、この中で比較的遺存状態の良好な48点を図示した。

1は、J-23グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表面は強く還元され灰黒色を、裏面はやや還元され淡褐色を呈していた。表面の一部を欠失していた。

2は、J-23グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表裏両面とも強く酸化され、橙褐色を呈していた。

3は、K-23グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表面はやや酸化され褐色を、裏面はやや酸化され灰褐色を呈していた。表面の一部を欠失していた。

4は、J-23グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表裏両面とも強く酸化され、橙褐色を呈していた。上端部はわずかに還元され灰色を呈していた。

5は、K-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面は一部欠失していた。表面は強く酸化され橙褐色を、裏面は還元され灰黒色を呈していた。

6は、I-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表

面はやや還元され灰色を、裏面はやや酸化され淡褐色を呈していた。上端は欠失していた。

7は、J-23グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表面はやや還元され灰色を、裏面はやや酸化され橙褐色を呈していた。

8は、表土から検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表面は還元され灰色を、裏面は酸化され褐色を呈していた。側面の一部を欠失していた。

9は、J-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表面は酸化され褐色を、裏面は強く酸化され橙褐色を呈していた。胎土の一部に、混和材として用いられた植物繊維が炭化せずに残存していた。

10は、J-24グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表裏面ともに強く酸化され橙褐色を呈していた。

11は、J-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表裏面ともに弱く還元され灰褐色を呈していた。

12は、J-24グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕が多少認められた。表面は還元され灰色を、裏面は酸化され淡褐色を呈していた。

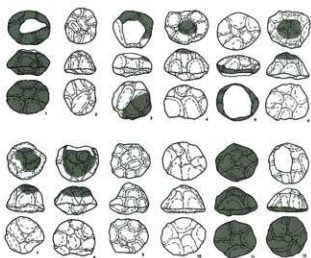
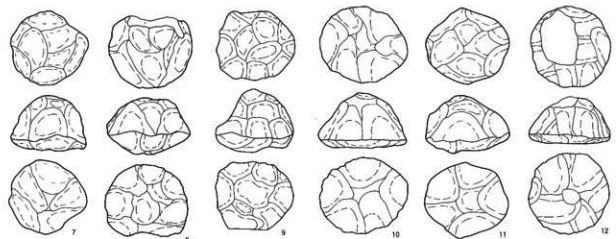
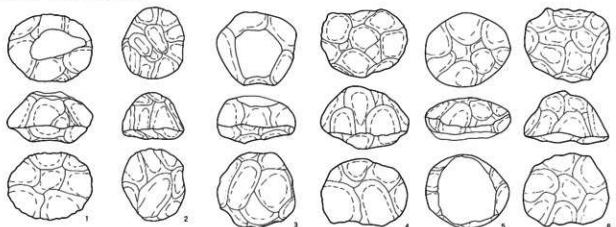
13は、K-24グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表裏面ともに酸化され褐色を呈していた。側面の一部を欠失していた。

14は、J-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕がかなり認められ、表面は酸化され橙褐色を呈し、裏面は欠失していた。

15は、J-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕が多少認められた。表面は酸化され橙褐色を呈し、先端を一部欠失していた。裏面はやや酸化され褐色を呈していた。

16は、J-24グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表面は還元され灰色を、裏面は酸化され橙褐色を呈していた。表面の先端を欠

第250図 半球状土製品(1)



失していた。

17は、J-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表裏面ともに酸化され

淡褐色を呈していた。

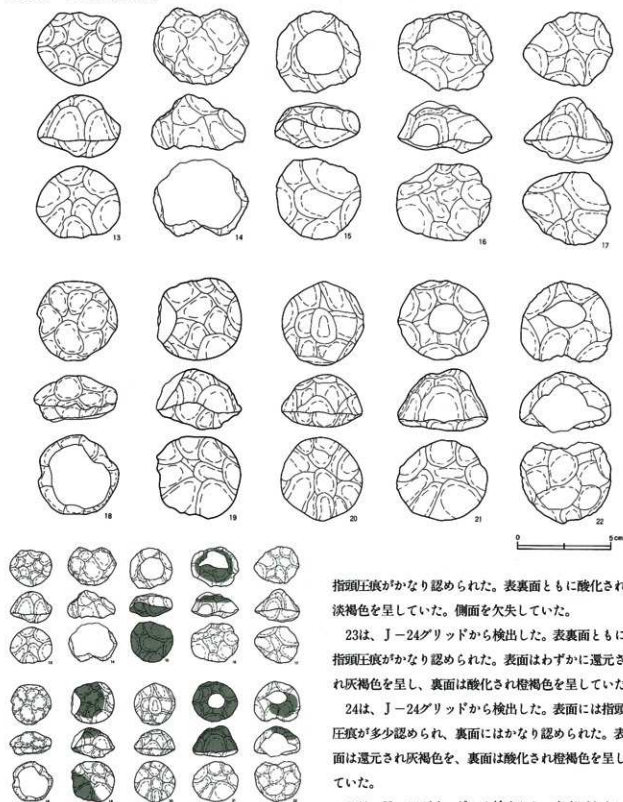
18は、K-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕がかなり認められ、裏面は欠失していた。表面は酸化され橙褐色を呈し、裏面は還元され黒色を呈していた。

19は、J-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表面はやや還元され灰褐色を、裏面は酸化され褐色を呈していた。側面を欠失していた。

20は、J-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表裏面ともに強く酸化され橙褐色を呈していた。

21は、I-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表

第251図 半球状土製品(2)



面は還元され灰色を、裏面は酸化され橙褐色を呈していた。表面の先端を欠失していた。

22は、J-24グリッドから検出した。表裏面ともに

指頭王痕がかなり認められた。表裏面ともに酸化され淡褐色を呈していた。側面を欠失していた。

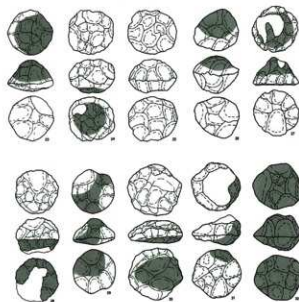
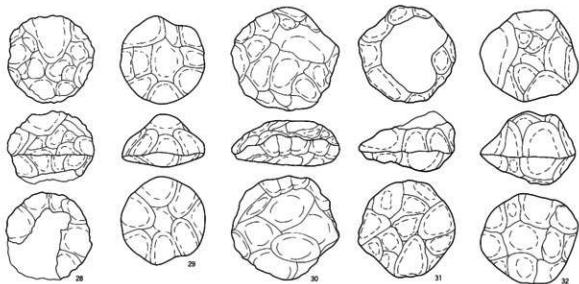
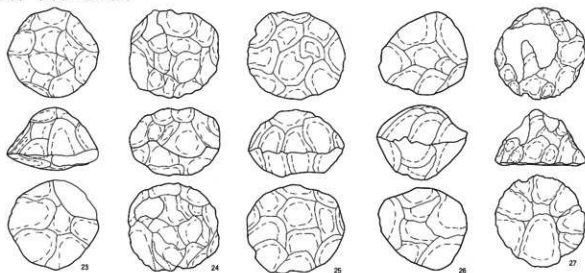
23は、J-24グリッドから検出した。表裏面ともに指頭王痕がかなり認められた。表面はわずかに還元され灰褐色を呈し、裏面は酸化され橙褐色を呈していた。

24は、J-24グリッドから検出した。表面には指頭王痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表面は還元され灰褐色を、裏面は酸化され橙褐色を呈していた。

25は、K-24グリッドから検出した。表裏面ともに指頭王痕がかなり認められた。表裏面ともに酸化され褐色を呈していた。

26は、J-23グリッドから検出した。表面には指頭

第252図 半球状土製品(3)

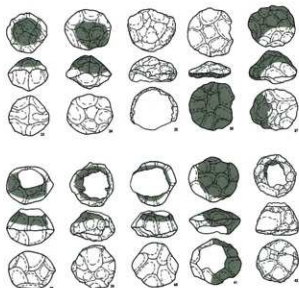
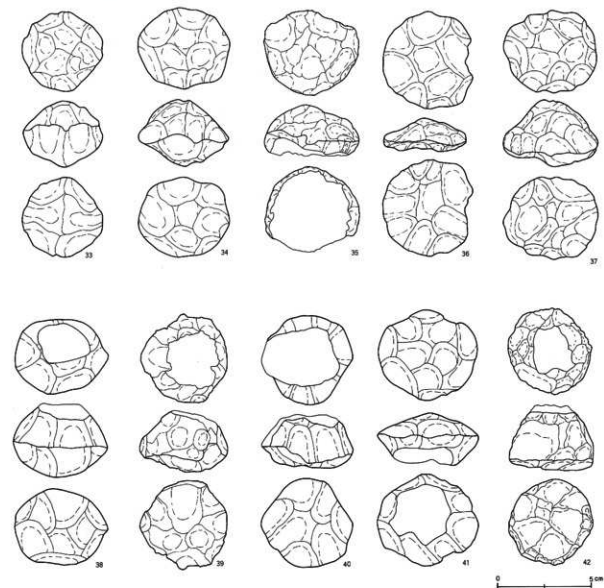


圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表面は酸化され褐色を、裏面は還元され灰褐色を呈していた。

27は、J-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはあまり認められなかった。表面の上端を一部欠失していた。

28は、J-23グリッドから検出した。表面には指頭圧痕がかなり認められ、裏面には多少認められた。表面は酸化され橙褐色を呈し、裏面は還元され黒色を呈していた。

第253図 半球状土製品(4)

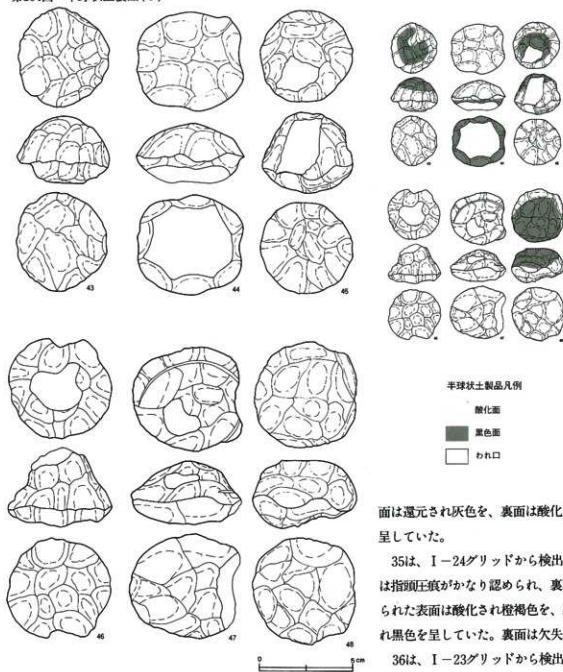


29は、I-24グリッドから検出した。表裏面ともに指頭玉痕が多少認められた。表面はやや還元され灰黒色を、裏面はやや酸化され灰褐色を呈していた。

30は、J-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭玉痕がかなり認められた。表面はやや還元され灰色を、裏面は酸化され橙褐色を呈していた。表面の上端は欠失していた。

31は、J-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭玉痕がかなり認められた。表面はやや還元され灰色を、裏面は酸化され橙褐色を呈していた。表面の上端は欠失していた。分析資料No.5番とした。

第254図 半球状土製品(5)



半球状土製品凡例

酸化面

黒色面

われ口

32は、I-24グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕が多少認められた。表裏面ともに還元され灰色を呈していた。

33は、K-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表面は還元され灰黒色を、裏面は酸化され橙褐色を呈していた。

34は、K-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表

面は還元され灰色を、裏面は酸化され橙褐色を呈していた。

35は、I-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕がかなり認められ、裏面に多少認められた表面は酸化され橙褐色を、裏面は還元され黒色を呈していた。裏面は欠失していた。

36は、I-23グリッドから検出した。表裏面ともに指頭圧痕がかなり認められた。表面は酸化され褐色を、裏面は還元され灰黒色を呈していた。

37は、J-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表裏面ともに還元され灰色を呈していた。

38は、I-24グリッドから検出した。表面には指頭圧痕が多少認められ、裏面にはかなり認められた。表面は還元され灰色を、裏面は酸化され褐色を呈していた。表面の先端部分は欠失していた。